

ハリー・ポッターと魅了の少女

梅檀若葉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魅了の魔眼を持った少女がホグワーツに入学して頑張る作品です。

初投稿作品です。

暇な時にコツコツ書いていこうと思っていきます。

色々と拙いところがあると思いますが温かく読んで頂けると幸いです。

7月8日にユーザー名変えました。

2018年1月3日迄に投稿していた話を修正しました。(ルクスリアの口調統一、誤字脱字修正、ノリとテンションで書いてしまった所の修正)

目次

賢者の石

魅了の少女

入学準備

ホグワーツ特急

組み分け

授業

ハロウィン

クイデイツチ

クリスマス

禁じられた森

試験と試練

賢者の石

一年目の終わり

夏休み〜ホグワーツへ

ギルデロイ・ロックハート

穢れた血

133 126 118 108 96 82 73 62 52 38 30 23 14 7 1

賢者の石

魅了の少女

「どこか。」

とある孤児院の前で全身黒づくめの男がそう呟いた。その男は迷わず孤児院のベルを鳴らす。すると、孤児院の院長である女が男を見て、警戒しながら出てきた。

「何のご用件ですか？」

「我輩はここに居る娘に用があつて参つた。手紙が届いているはずだが？」

男は淡々と話した。その言葉を聞いた途端、女の顔が憎しみに染まった。

「あんたが例の学校の人間かい？あの子をホグワーツ魔法魔術学校とかいう、怪しい学校になんて行かせるものか。あの子は赤ん坊の頃からここに居る。ここ以外に行かせるなんてとんでもない。あの子は私の側に居るのが一番なんだ。あの子を私は誰よりも愛しているんだ。あの子は私が大切に育てるんだ。あの子を私から取るんじゃない!!」

「貴様の事情など知らん。我輩は任された仕事をしに来ただけだ。それに行くか行かないかを決めるのはその娘だ。彼女に会わせたまえ。」

「言つただろう。あの子は行かせないし行かない。あの子は一生私と共に居るべきなんだ。あんたになぞ会わせんぞ!!」

「ならば少しばかり強引にいかせてもらおう。」

そう言う男は懐から何かを取り出した。拳銃を想像した女は一瞬青ざめたが、出てきたものを見てすぐに笑い始めた。

「なんだいそりや？ただの木の棒じゃないか。そんなものでどうす…」

男は無言で女に木の棒を向けた。すると、女は突然糸が切れた様に気を失った。男は女を一瞥すると孤児院の中に入っていった。

孤児院の中は薄暗かった。電気が点いておらず、少女が何処にいるのか分からない。仕方なく男が部屋を一つ一つ見て回っていくと、一番奥に明かりが点いている部屋を見つけた。男が向かっていくと、

「今だ!!」

一斉に各部屋から子ども達が飛び出してきた。

「皆で守るんだ!」

「絶対にここを通すな!!」

「守つてと頼まれたんだから守りきるぞ!!」

皆その様なことを叫びながら男に向かってきた。その手には金槌やシャベル、刃物まで持っている子どももいる。挟み撃ちの形になり男に逃げ場はなく、無傷では済まないハズであった。しかし、男は一瞬にしてその場から消えた。

「い、いなくなつた…」

「消えたぞあの男」

「ここがホグワーツであつたなら貴様らには罰則を与えられたのだがな。」

子ども達が慌てて男の声をする方を見ると、そこには木の棒を構えた男が嘲笑っていた。子ども達はそこで意識を失つた。

「なんなのだこの孤児院は…皆どこか狂気を纏っている。」

男はそんなことを考えながらも奥の部屋の中に踏み込んだ。

その部屋に少女はいた。少女は腰まで届く淡いピンクブロンドの美しい髪によつて顔を隠し、部屋の隅で震えている。男は少女に話しかけた。

「我輩はホグワーツという学校の教師である。貴様から全く連絡がなかったためこうして直接答えを聞きにきた。」

「そんなこと言つて私を自分のモノにしようとするんでしょ?! 分かつてるんだからね!!」

少女は男を恐れながらも叫んだ。

「何故我輩が貴様を自分のモノにする必要があるのかね?」

「皆そうしようとするわ!! 美しいとか欲しいとか愛してるとか勝手なことばかり言つて。私は誰のものでも無いわ!!」

「埒があかない。」

男はそう考えた。どうもこの孤児院にいる者は人の話を聴かずに一方的に喚き続けてくる。この日三度目となる実力行使に溜め息が出た。

「悪いが貴様の心を少し見させてもらうぞ。『レジリメンスー開心』」

「どの人間からも甘い言葉をかけられる少女「気持ち悪い」、欲望を叶えようと少女に襲い掛かる男達「気持ち悪い」、恐いと思つたら吹き飛んだ男達「気持ち悪い」、それでもまた襲い掛かる男達「気持ち悪い」、何処かに消えろと必死に言うと言つた男達「気持ち悪い」、男だけでなく女も、同じ孤児も彼女を一方的に求めてくる「気持ち悪い」、同じ事が何度も繰り返される日々」

「もうやめて!!」

少女は叫んだ。頭を激しく揺らしながら此方を睨み付ける。すると、髪の間から少女の顔が見えた。

「美しい」

男はそう思った。彫像の様に整った顔、雪の様に白い肌、形が良く白い肌に映える唇、そして何よりも爛々と輝いているオツドアイ。左目が茶色で、右目は金色に輝いている。

「そういうことか」

男は納得がいった。何故この孤児院が歪んでいたのか、その理由が。

「何処かに消えてよ!!皆みたいに!!」

「残念ながらまだ答えを聞いていないので出来ないな。」

男がそう返すと少女は、愕然とした表情で此方を見た。

「なんであなたはいなくならないの?皆はいなくなつたのに!!」

「我輩は君と同じだからだ。君は我輩と同じ魔法使いだ。」

「魔法…使い…?」

少女は予想外の言葉に驚き、そして納得したような表情になった。

「そつかあ。私本当に魔法使いなんだ。だから皆あんな風になつちやうんだ。ねえ、魔法使いは皆私みたいななの?」

「そんなことはない。その力は君だけのモノだ。君はただの魔法使いだ。魔眼使いだ。」

「魔眼…?」

「さよう…。おそらく君の右目を見たものに魅了の呪いをかけるものだろう。それも非常に強力な。」

「私は呪いなんてかけてない!!」

「だろうな。恐らく君の意思とは関係なく見たもの全てに呪いをかけるのだろう。」

「じゃあ、私はどうやっても呪いをかけ続けちゃうの?」

「いや、恐らく君の右目を見なければ呪いはかからないはずだ。若しくはホグワーツに来れば君の力をコントロールする術が見つかるやもしれん。」

「…そのホグワーツっていう学校に行けばコントロール出来るようになるの?」

「断言はできませんがここに閉じ籠っているよりは可能性があるだろう。それとも、ここでビクビクと隠れて暮らし続けるかね?」

少女は考え込んだ。男はジツと待つ。そして少女は決心を固め答えを告げた。

「私をそのホグワーツっていう学校に入学させて下さい。」

「よろしい。入学を歓迎する。」

少女は男の前で初めて笑った。実際には顔は隠れているのだが、それでも彼女の美しさが伝わってくる。

「これは早急に対策を立てねば混乱が生じるな。」

男がこの先のことを考えていると、少女が突然ハツとした顔になり、すぐに恥ずかしそうな顔で尋ねてきた。

「私、あな…先生の御名前を聞いていませんでした。教えていただいてもいいですか?」

「我輩はセブルスⅡスネイプだ。ホグワーツで魔法薬学の教鞭をとっている。」

「スネイプ先生ですね。よろしくお願いします。」

「入学が決まったところだが、最初の指導といこうか。名乗られたら名乗り返すのが礼儀だ。君も名乗りたまえ。」

少女は暗い表情になり、

「私自分の名前が嫌いなんです。それに、手紙に私の名前があつたん

ですから知ってるはずですよね？……それでもですか？」

「君が自分の名前をどう思っているようにと我輩はどうでもいい。だが礼儀として、君がどう思おうが名乗るべきだ。」

スネイクが冷たく言い放すと、少女は深呼吸して気持ちを作り、名乗った。

「私の名前は……ルクスリア……です……。姓はありません。」

「色欲か……。君の力に相応しい名前ではないか。」

「院長が勝手につけただけです。私はこんな名前捨てたいくらいです。」

憐れな娘。スネイクはそう思った。しかし、同時に疑問も持った。

「何故我輩には呪いがかからないのだ。魔眼の呪いについては、我輩の予測通りであるはずだ。それなのになぜ……。」

入学準備

「ところでスネイプ先生、このリストに載ってるものって何処で揃えられるんですか？私、魔法の杖なんて売ってるの見たことないんですけど…」

「それらの品はダイアゴン横丁で全て揃えることができるので安心してたまえ。また、魔法族出身でないものは買ひ物に担当者が付き添う。君の場合は我輩だ。」

ルクスリアは安心した様子だったが、直ぐにハツと何かに気がついた。

「先生、私お金を全然持つてないです。」

「それも安心したまえ。ホグワーツでは、君の様な経済的に厳しい生徒には援助をする。もちろん返済は不要だ。」

スネイプの説明を聞き、ルクスリアは安心感より先に不信感が湧き上がってきた。

「ホグワーツって不思議ですね…生徒にお金を出してくれるなんて…何か裏がないか勘繰っちゃいます。」

「…君がどんな想像をしたのかはどうでもいいが、一応説明しておこう。魔法使いは非常にマグル……非魔法族のことなのだが、マグルと比べて人口が少ない。それ故にこれ以上人口を減らさないためにも、人材の確保に励んでいるのだ。…中には例外もいるがな。また、魔法は秘匿されるべきものであり、マグルに存在が明らかになることは好ましくない。そのため、魔法の才の有る者を野放しにしておきマグルに魔法を見られる危険性があるよりは、金を出してでもこちらの世界に引き込んだ方が安上がりなのだ。」

「なるほど、私に魔法をコントロールする術を学ばせる代わりに安全を手に入れるのですね。」

「その通りだ。さて、時間がないのでこれよりダイアゴン横丁へ向かう。」

「孤児院の人達はどうするんですか？」

「暫く眠っているので問題なからう。何かあれば今日のことについてのみ記憶を改竄しておく。」

「分かりました。それでは準備しますので部屋の前で待っていてください。」

スネイプはルクスリアの言葉に従い部屋を出た。部屋からは衣擦れの音が聞こえ、5分程でルクスリアが出てきた。

「君はふざけているのかね？」

ルクスリアの格好は異様であった。肌の露出を一切なくし、大きなフードつきのコートを着て顔を完全に隠していた。

「いつも出掛けなければいけない時はこの格好なんです。この格好にしてからは、人が寄ってくることはないんですよ。」

「……暫しここで待っていたまえ。30分程で戻る。」

そう言うと、スネイプがその場で回転し姿が消えた。

宣言通り30分程でスネイプは帰ってきた。彼はルクスリアに小さな箱を私に渡した。

「これは……眼帯ですか？」

「左様。しかもただの眼帯ではない。魔眼の力を封じ込める事が出切る魔眼殺しの眼帯だ。」

「じゃあ、この眼帯をすれば呪いをかけずにすむんですか!？」

「恐らくな。だが、魔眼の中には次第に力が増し魔眼殺しでも封じ込めなくなることもあるため、絶対とは言い切れん。しかし……そのような格好でずつといるわけにはいかんだろう。眼帯をつけ出来る限り君の目を他人に見せない様にするべきだ。」

スネイプの話を聞き、ルクスリアは明らかに喜んだ。自分を隠しながら、生活しなくていい。それだけでルクスリアは幸福を感じていた。

「ありがとうございます、スネイプ先生。早速着けてきます。」

そう言うと、部屋に戻って行き5分程で出てきた。服装は普通になつたものの髪型はそのままで。

「先生、やっぱり……何かの拍子に呪いをかけてしまったら嫌なので……眼帯もつけますが髪型はこのままにしようと思います。」

「……君がそう決めたのなら我輩はもう何も言わん。さて、今度こそ行こうか。我輩の腕をしっかりと掴みたまえ。」

「？分かりました。」

ルクスリアが恐る恐るスネイプの腕を掴んだ途端、内臓が引つ張られる様な感覚があつた後、目を開けると、見慣れた孤児院ではなくなっていた。

「ここは漏れ鍋という魔法族の店だ。この店の裏からダイアゴン横丁へ行ける。」

スネイプがルクスリアに説明していると、店主と思われる男がはなしかけてきた。

「やあ、セブルス。君がここに来るとは珍しいね。」

「今回はホグワーツの仕事で来ただけだ。」

「そんなとこだと思つたよ。……そちらのお嬢さんは新入生かな？漏れ鍋にようこそ。私は店主のトムだ。」

ルクスリアは会釈だけをし、直ぐにスネイプの陰に隠れてしまった。

「恥ずかしがり屋なのかな？顔も隠しているしね。まあそんなことよりセブルス、今日この店に誰が来たと思う？なんと、あのハリー・ポッターだ!!あのお方も今年ホグワーツに入学なんだってさ。いやー会

えて光栄だったよ。」

「……すまないがトム、我輩達は急いでいるので君の話の話を聞いている余裕はないのだ。」

突然不機嫌になったスネイプはトムの話を遮り、歩き出してしまったので、ルクスリアは慌てて追いかけて行つた。

漏れ鍋の裏手に行くとなレンガの壁があつた。

「一度しかやらん。よく見ていたまえ。」

そう言うとなスネイプは、杖を取り出してレンガを叩き始めた。叩き終わるとレンガが勝手に動きだし、それが終わると目の前には全く違う景色が広がっていた。

ローブを着込んだ人々、箒に見いつている子ども達、蛙の卵など怪しいものを売っている店、何もかもが初めての光景であつた。

「こんな場所があつたなんて」

「魔法族はこのように、マグルに気付かれないように街を作り暮らしているのだ。さて、まずは最も大切な杖を選びに行く。ついてきたまえ」

「杖はここで購入することが出来る。さあ、行ってきたまえ。我輩はその他のものを揃えてくる。これだけあれば杖の代金は足りるはずだ。受け取れ。」

そう言うと、スネイプはルクスリアに金が入っているであろう巾着袋を渡しさつきと行ってしまった。

「スネイプ先生行っちゃった……」

一人店の前に残されてしまったルクスリアは、ただでさえ初めての場所と多くの人がいる状態であったのに、頼れる人もいなくなってしまう、急激に強い不安に襲われ始め、その場から動けず、店の中にも入れずにいた。暫くして落ち着いてくると意を決して、店のドアを開けた。

「ようこそ、お嬢さん。私は店主のオリバンダーです。」

店の中には老人が、山のように箱が積んである中でポツンと待っていた。

「いつ御来店なさるのかを今か今かと待っていました。そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。」

「どうやら、店の外でのルクスリアの様子はオリバンダーに筒抜けであったようだ。ルクスリアは途端に恥ずかしくなった。」

「さて、早速杖を選ぶといたしましょうか。杖腕はどちらですか？」「杖腕？……利き腕なら右手です。」

答えると、オリバンダーはルクスリアの腕などを測り始め、終わると店の奥へと入っていった。

「さてさて、お嬢さんにはどのような杖が良いか。心配しなくとも貴女にピッタリの杖を選んで差し上げますぞ。まずは、オークに一角獣の毛28センチ、しなやか」

ルクスリアが持つと直ぐ様オリバンダーは杖を取り上げてしまった。

「違うようじゃ。では、次はこれを。ブナにセストラルの毛32センチ、頑固だが強力」

今度は持った瞬間、窓ガラスが割れた。その後も何本も試すが全く見つからない。それなのに、オリバンダーは何処か楽しげであった。「二日に二人も難しいお客さんが来るとはなんとという日じゃ。さて、いったいどれが良いことやら」

ルクスリアは、実は自分に合う杖が無いのではと思い始め、ソワソ

ワと店内を見回し始めた。すると、1つの箱に目がいった。

「オリバンダーさんあの杖は？」

「なんと……その杖を見つけてしまわれましたか。あの杖は私が一度しか使ったことのない樹を使っているものでして、非常に扱いが難しいためずっと売れ残っておったのじゃが……これも何かの縁かもしれません。」

そう言いながら、オリバンダーは大切そうに杖を持ってきた。

「ヤドリギにドラゴンの心臓の琴線23センチ、守りの呪文に最適」

ルクスリアが杖を持つと、店内の木材から枝が延び始めた。

「ブラボー!! 本当にその杖に選ばれるとは……その杖に使われているヤドリギは、とある大樹に寄生していたものでしてな。その大樹から作られたと言われている杖は非常に強い力を持った杖と言われているが、その杖は非常に強い守りの力を持っている。」

「守りの力……」

「そうじゃ。その杖はお嬢さんが何かを守ろうとするときに真の力を発揮するであろう。大事になさってください。」

ルクスリアは代金を払って(初めての魔法界の通貨で困った)店を出た。そこには、荷物を抱えたスネイプが待っていた。

「杖は買ったな? 次は制服を買いに行く。ついてきたまえ。」

スネイプはまたもや素っ気なく直ぐに行ってしまったため、ルクスリアは 半ば諦めながらついていった。

「この店で買うことができる。行ってきたまえ。」

最早作業をこなす様にスネイプは急かした。ルクスリアは大人しく言うとおりにした。

全ての買い物を終え、アイスを食べて休んでいるルクスリアにスネイプは話し始めた。

「さて、明後日に君はホグワーツに行くことになるのだが…残りの日を何処で過ごす？ 孤児院に戻るか？」

「……………できればあの孤児院には帰りたくありません。皆私の呪いのせいでおかしくなってしまうて…………身勝手ですけど、私はあそこに帰るべきではないと思いますし、帰ることが怖いんです。」

「ならば漏れ鍋にこの二日は泊まりたまえ。手続きはしておこう。」
「ありがとうございます。」

その後、トムに話を通しスネイプは去っていった。ルクスリアは勇氣を出してトムや他の客と話をし、あつという間に二日がたった。

ホグワーツ特急

ホグワーツ特急改

「トムさん、駅まで送って下さってありがとうございました。」
「ホグワーツは本当に楽しい所だ。君もきつと気に入るよ。また、夏休みに店においで。待っているよ。」

トムは駅までルクスリアを送ってくれた。ルクスリアが礼を告げると、トムは笑顔で送り出してくれた。

この二日間は、ルクスリアの人生の中で最も幸福な時間だった。ルクスリアに向けられる、欲望に支配されていない人の笑顔。顔を隠しているルクスリアに不信感を抱いている顔。相手に気を使うお喋り。全てが初めての経験だった。普通、不信感を向けられたり、気を使って話することは嬉しくないことだが、欲望の対象ではなく、ルクスリアとして見てもらえた事が何よりも嬉しかった。

この二日間の事を思い出しながら駅の中に入っていった。

「9と3 / 4番線ってどこなの……そんな所この駅に無いじゃん……」

ルクスリアは途方に暮れていた。早めに来たお陰で時間にはまだ余裕はあるが、既に30分以上駅の中をさ迷い続けている。

「トムさんが送ってくれたからこの駅で間違いは無いんだよね。………ん？待てよ。魔法使いは魔法を秘匿しなきゃいけないから、マグルにバレないようにして暮らしてるんだよね。………ということとは、何処かに隠してあるのかな？」

スネイプに教わった事を思い出し、ルクスリアは考え始めた。

「9と3／4番線ってことは9番線と10番線の間になんか隠されてるのかな？………間に柱が立ってるからその3番目は………あそこかな？」

ルクスリアは目をつけた柱の前にたどり着いた。

「周りの人がこの柱を避けてる………何かの魔法がかかっているのかな？」

ルクスリアが柱に触れた瞬間、指先が消えた。

「ここが入り口になってるんだ。」

ルクスリアは意を決して柱の中へと進んでいった。思った通り柱の中に道が続いていた。そこを通り抜けるとそこにはもう1つ駅があった。たくさんの人がいるが、先程までの駅にいた人々とは違い、そこには魔法使いばかりがいる。何か黒い毛むくじやらの生き物が入った箱を持ち、それを見せて驚かせている生徒。ダイヤゴン横丁でたくさん売られていた、梟の入った籠を持った生徒達。どこかチグハグな服装で抱き合っている親子。皆が別れの気持ちと、これからの学校生活に対する期待に満ち溢れていた。

ルクスリアはその光景を見ながら、早めに列車へと乗り込んだ。

「仕方ないとはいえ、親子が仲良くしている姿を見るのはやっぱりちよつと………辛いな………」

適当に空いているコンパートメントを見つけ、外の様子を意識から遠ざける様に、教科書を読み始めた。

「ここ、空いてる？」

教科書に夢中になっていたルクスリアは、突然の声に少し驚いた。

「ごめん、読書を邪魔しちゃって。それで、ここって他の人もいる？もしいないなら一緒に座ってもいいかな？」

目の前には、ボロボロの眼鏡をかけた貧相な体つきの男の子が立っていた。

「いいよ。私以外にはいないし。」

男の子はホッとした様子で向かいの席に座った。

「僕の名前はハリー・ポッター。一年生なんだ。君の名前は？」

「私も一年生だよ。私の名前は……あの……私の名前ってさ、その、とても……変わっているんだけど……聞いても笑わない？」

「もちろん。人の名前を笑うなんてそんなことはしないよ!!」

「約束だよ。……じゃあ、教えるね。私の名前は、ルクスリア……。姓は無いよ。」

「姓が無いなんて珍しいね？何かあったの？」

ハリーは、「ルクスリア」には言及せずに姓が無いことについて聞いてきた。ルクスリアは名前について余り語りたくなかったが、ハリーが純粹に興味を持っているだけの様なので仕方なく答えた。

「私孤児なんだ。生まれて直ぐの私を親は孤児院の前に置いていったんだった。だから、姓がないんだ。名前も孤児院の人が勝手につけたの。」

「そうなんだ。じゃあ、ルクスリアは僕と少し似てるね。」

「ハリーも孤児院育ちなの？」

「僕は孤児院じゃなくて伯母さん夫婦の所で育てられたんだ。両親は……僕の1歳の誕生日に悪い魔法使いに殺されちゃったらしいんだ。だから、僕も君と同じで両親の事を全然知らないんだ。最近ようやく両親と自分が魔法使いつて事を知ったくらいなんだよね。」
「そうなんだ。私も最近自分が魔法使いつて知ったのよ。じゃあ、私達は似た者同士ね。」

ハリーの思わぬ告白に、一瞬面食らったルクスリアだったが、ハリーも自分と似た境遇で育ったことに対し親近感を覚えた。

そこに、燃えるような赤い髪の毛の子が通りがかり遠慮がちに声をかけてきた。

「ねえここ空いてる？他の所はどこもいっぱいだよ……」

「構わないよ。」

二人の答えに安心した様子で男の子は入ってきた。

「僕、ロン・ウィーズリー。一年生なんだ。助かったよ。座れる場所が見つからなくて困ってたんだ。」

「僕達も同じ一年生だよ。よろしくロン。僕はハリー・ポッター」

「君がああハリー・ポッターなの？じゃあさ、本当にあるの？……あの……傷が……」

「うん、あるよ。」

そう言つてハリーは前髪をあげた。ハリーの額には稲妻の様な傷痕があった。

「うわー、君本当にハリー・ポッターなんだ。」

「……ハリーつて有名人なの？」

ルクスリアはロンのハリーに対する態度に疑問を感じ、質問をした。すると、ロンは信じられないといった顔で話し出した。

「あたり前じゃないか!!例のあの人を倒して生き残った男の子だよ!!知らないの!!」

ロンの大袈裟な態度にルクスリアは若干苛立ちを覚えた。

「知らないものは知らないよ。私、マグル育ちだから、魔法界のことなんて殆ど知らない。」

そう言うと、ロンは合点がいった様子で話した。

「なるほどね。マグル生まれの子なら仕方ないね。……ええとね。以前、ある物凄く力の強い闇の魔法使いが魔法界を恐怖に陥れていた時代があったんだ。その魔法使いに勝てる人は誰もいなくて、あのダンブルドアでさえ勝てなかったんだよ。それなのに、その魔法使いはある日突然敗れたんだ。今までどんなに強い魔法使いが闘つても勝てなかったのに、たった一人の子どもに負けたんだ。その子どもがハリー・ポッターなんだよ。だから、ハリーは魔法界では有名なんだ。」

ハリーは、ロンの説明を聞きながら少しうんざりしていた。

「色んな人が僕の事を知ってるんだけど、僕はその時の事を何も覚えていないんだ。皆が優しくしてくれるのは嬉しいんだけど、なんだか目の前にいる僕を見てくれないみたいで少し嫌なんだ。」

ハリーの言葉を聞いてルクスリアは、表面上は平気な様に振る舞ったが、心の内ではハリーに激しく共感していた。

実際に経験していることは異なっているが、自分自身を見て欲しいというハリーの気持ちはルクスリアには痛いほど良くわかった。

「そうだよ、どんな過去があろうと私達の目の前にいるハリーのことを見てあげなきゃ。」

ルクスリアの言葉にロンは恥ずかしそうにしながらハリーに謝った。そして、誤魔化す様にルクスリアに話しかけた。

「君の名前も教えてよ。」

「……ルクスリア。姓は無いの。」

先程のこともあったか、ロンは名前について気になっているようだが何も聞いてこなかった。ロンが見せた気づかいに、ルクスリアはロンのことをちよつぱり見直した。

その後、3人で談笑していると、魔女がニコニコと笑いながらお菓子等が大量にのっけているカートと共に現れた。

「坊っちゃん達、何か欲しいものはあるかい？」

「……僕はいいや。ママが作ってくれたものがあるし……」

「私もいらないます……」

ロンとルクスリアは恥ずかしそうに答えた。しかし、チラチラと物欲しそうにカートのお菓子を見ていることにハリーは気がついた。

「ゼーんぶちようだい!!」

ハリーはポケットからガリオン金貨を取り出しながら言った。魔法はお菓子を渡すと、満足そうに去っていった。

「これ3人で一緒に食べよう。僕ね、魔法界のお菓子って食べるの初めてなんだ。それに、友達とお菓子を分けて食べることに、僕、経験したことが無いんだ……だから、一緒に食べよう!!」

ハリーの言葉にロンとルクスリアは喜び、お菓子を食べ始めた。ルクスリアは、初めてみる魔法界のお菓子に大興奮だった（ハリーとロンはものを食べる時に覗くルクスリアの形の良い唇に目を奪われていた）。本当になんでもありの百味ビーンズ、本物の蛙のように動く蛙チョコレート、そして何よりも他の人と普通に、楽しい時間を過ごせている事が何よりも嬉しかった。

そのまま談笑を続けていると、突然、栗色の豊かな髪の子が話しかけてきた。

「あなた達ヒキガエルを見なかった？ネビルって男の子のペットが逃げちゃったの」

「私達見てないよ」

ルクスリアが告げると、二人も頷いた。

「そう分かったわ、私ハーマイオニー・グレンジャー、マグル生まれの一年生よ、あなた達も見たところ一年生のようね、あら、驚いたあなたハリー・ポッターね、私あなたについての本を何冊か読んだわ、子どもなのに例のあの人を倒したっていったいどうやったの？」

ハーマイオニー・グレンジャーと名乗った女の子は一息で喋りきった。

「ハーマイオニー、本に載っていることなんかよりも目の前にいるハリーの事を見たら？」

ルクスリアはハーマイオニーの態度にイライラしながら言った。「あら、本に載っていないことは実際に確かめるしかないと思っけど、そういえば貴女の名前は？なんでそんな髪型をしてるの？」

「髪型について聞いちゃったよ!!」

ハリーとロンも気になっていたが、ルクスリアに気を使い髪型に

については聞かないようにしていたのだ。ハーマイオニーのズバズバと言う態度に、ルクスリアは苛立ちを隠そうともせずには答えた。

「名前はルクスリア。髪型について貴女に教えるつもりは無いよ。なんと言われようと私はこの髪型を変えるつもりはないし。」

ルクスリアの強気な話し方にハーマイオニーも苛立ちを見せ始めた。ハリーとロンは、巻き込まれでもしたら大変だと互いに目配せをし、行動に移した。

「ああー!! そういえば僕の自己紹介をしてなかったね! 僕はロン・ウィーズリー! ロンって呼んで!! よろしくねハーマイオニー!」

「そう言えばハーマイオニーはヒキガエルを探してるんじゃないかなかったっけ?! ここにはいないから他の場所を探してみたら?!」

二人は長年の友人の様に絶妙なコンビネーションを見せた。ハーマイオニーは本来の目的を思いだしたようだった。

「そうだったわ。じゃあ、私は行くわ。最後に、もう少ししたら到着だからあなた達も着替えた方がいいわよ。」

そういつてハーマイオニーは去っていった。

「嵐の様な子だったね。確かにそろそろ到着しそうだから着替えようか。……さ、先に僕達が着替えるからルクスリアは外で待っててもらってもいい?」

そのまま服を脱ごうとしたハリーとロンはルクスリアの刺すような視線（実際は隠れているけど）を感じ、慌ててルクスリアに提案した。ルクスリアは呆れた様子で外に出た。

コンパートメントの前で待っていると、青白く顎の尖った不遜な態度の男の子が、体が大きくいかつい男の子二人を引き連れてやってきた。青白い男の子は嘲笑うかのような声で話しかけてきた。

「この辺にあのハリー・ポッターがいると聞いてきたんだけど、君は知ってるかい?」

「うん知ってるよ。今中で着替えてる。」

ルクスリアは嘘をつく必要もないと考え、ハリーについて教えた。

「そうかい、じゃあここで待たせてもらおうとするよ。僕はマルフォイ。

ドラコ・マルフォイだ。こいつらはクラブとゴイル。君の名前はなんだい？」

「ルクスリアだよ。」

ルクスリアは、本日四回目となる自己紹介に、流石に名前を教えることへの抵抗が薄れてきていた。

「ずいぶんと個性的な名前だね。姓はなんだい？」

「ないわ。私孤児なの。」

「そうなのか。それは悪いことを聞いたね。」

マルフォイは全く悪びれた様子もなく、むしろ見下すような態度に変わった。

「お待たせルクスリア。君の番だよ。……彼らは誰だい？」

「ハリー、あなたに用があるらしいよ。じゃあ、私も着替えるてくるね。」

面倒なことが起こりそうな気がしたルクスリアは、さっさとコンパートメントの中に入っていき、鍵を閉めて着替え始めた。

着替え終えたルクスリアは二人に中に入っても良いことを伝えようとコンパートメントの扉を開けると、先程の三人組はいなくなっており、ハリーとロンは不機嫌になっていた。

その後は、到着迄の時間をお喋りをして過ごし（マルフォイの悪口が多かった）、そして遂にホグワーツに到着した。

列車から降りると、低く地面を揺らすかのような大声が聞こえてきた。

「イツチ年生!! イツチ年生はこつちだ。」

彼はハグリッドという森番らしい（ハリーが教えてくれた）。ハグリッドに着いていき、三人一組でボートに乗っていくとホグワーツが見えてきた。

「本物のお城じゃん!!」

ルクスリアは初めて見るホグワーツ城に大興奮だった。それは、他の一年生も皆同じようで歓声があがっているボートもあった。

岸に着き、城の中に入ると厳格そうな魔女が待っていた。

「マクゴナガル先生、一年生をお連れしました。」

「ありがとうございます、ハグリッド。ここからは私が案内します。一年生の皆さん、ホグワーツへの御入学おめでとうございます。私はミネルバ・マクゴナガル、変身術を担当しています。皆さんはこれより、大広間にて組分けの儀式を行います。これにより、グリフィンドール、レイブンクロー、ハッフルパフ、そしてスリザリンのどの寮に所属するかが決まります。寮は皆さんが授業以外の時間を過ごす場所であり、ホグワーツにおいての家でもあります。アルファベット順に呼ばれますので、名前を呼ばれたら前に出てきてください。……ちなみにファミリーネームの無いものは最後に呼ばれますので、安心して下さい。」

ルクスリアは事情を知っている人達からの視線を感じていた。

「今から全員の前で名前を呼ばれるんだ……。腹をくくらなきやなあ……。」

「それでは入場します。ついてきて下さい。」

マクゴナガルがそう言うのと、大広間の扉が開かれ光が射し込んできました。

ルクスリアはその光の中へと進んでいった。

組み分け

大広間に入ると、そこには魔法の様な空間が広がっていた。天井には満天の星空が輝いており、宙にはたくさんの蠟燭が幻想的に浮かんでいる。

「魔法で投影してるのよ。本で読んだわ!!」

列車で出会ったハーマイオニーが興奮気味に話しているのを聞き、ルクスリアはあらためて魔法の素晴らしさを味わった。

天井から視線を下げると、長いテーブルが四列あり、それぞれの寮毎に別れている。上級生達も、どの生徒が同じ寮になるのか気になっっているようでかなりそわそわしている。そのテーブルの奥には、教員達の席があり、そこにスネイプもいた。

そして、その中央に校長であるダンブルドアがいた。白い髭をたっぷりと蓄え、キラキラと輝く青い目をしていた。そのダンブルドアの前に、椅子と古ぼけた帽子が置かれていた。

全員が入場し終え扉が閉まると、突然その帽子がブルブルと震え始め、上下に口の様に裂け、驚いたことに歌い始めた。

私はきれいじゃないけれど

人は見かけによらぬもの

私を凌ぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真っ黒だ

シルクハットはスラリと高い

私はホグワーツ組分け帽子

私は彼らの上を行く

君の頭に隠れたものを

組分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

グリフィンドールに行くならば

勇気ある者が住う寮

勇猛果敢な騎士道で

他とは違うグリフィンドール

ハッフルパフに行くならば

君は正しく忠実で

忍耐強く誠実で

苦労を苦勞と思わない

古き賢きレイブンクロー

君に意欲があるならば

機知と学びの友人を

ここで必ず得るだろう

スリザリンではもしかして

君はまことの友を得る

どんな手段を使っても

目的遂げる狡猾さ

かぶってごらん！ 恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

君を私の手にゆだね（私に手なんかないけれど）

だって私は考える帽子！

帽子が歌い終わると、全員が拍手をした。拍手が終わると、いよいよ組分けが始まった。

「私はどの寮になるんだろう。どの寮も当てはまってはまってそうな気もするし、どの寮も当てはまってなさそうな気もする……。しかも一番最後だなんてこの緊張が続くのは辛いよ……。」

ルクスリアは生徒が組分けされる度に緊張感がどんどん増し
てきていた。

「グレンジャー・ハーマイオニー」

「グリフィンドール!!」

ルクスリアは列車内でのハーマイオニーとの関わりから、勝手に

レイブンクローかと思っていたが予想が外れ驚いた。どうやら、自分も人の表面しか見ずに人を判断していたようで、ハーマイオニーに言った言葉を思いだし、恥ずかしくなった。

「ポッター・ハリー」

ハリーの名が呼ばれると大広間は、先程までの喧騒が嘘の様に静まり返っていた。どうやら、どの寮も有名人であるハリーが、自分の寮に組分けられることを期待しているようであった。ハリーが帽子を被っても帽子は直ぐには組分けをせずに、低く唸って悩んでいるようだ。そして、数分が経ったときハリーが小声でなにかを呟きそれを聞いた帽子は、高らかに宣言した。

「グリフィンボール!!」

グリフィンボールのテーブルから、爆発したかのような歓声があがった。赤毛の双子は肩を組み「ポッターを取った!ポッターを取った!!」と騒いでいる。

大広間が一度落ち着くと組分けは再開された。

「ウィーズリー・ロナルド」

ロンは緊張で顔を青くしながら、進んでいった。

「グリフィンボール!!」

帽子が宣言すると、ロンは安心した顔でテーブルに向かっていった。そこで、同じ赤毛の生徒達が彼を叩いて喜んでいった。

気がつくくと、残っているのはルクスリアだけになっていた。緊張はどうにピークに達しており、心臓はバクバクと激しく鼓動しており、手足もプルプルと震えている。

「ルクスリア」

呼ばれた。震える足を必死に動かしながら、進んでいく。大広間がざわついている。

「姓がないのか?」

「ルクスリア（色欲）って……」

「なんであんな髪型をしているんだ?」

そんな声がヒソヒソと囁かれている。覚悟していた事とはいえ、こんなに一度に不審なモノを見る目を向けられたら、心が傷つく。髪

の下では苦悶の表情をしながらなんとか帽子のもとへたどり着き、視線を遮るように帽子を深く被った。

「安心したまえ。あの程度の好奇の目など一晩で落ち着くよ。」

突然の頭の中に響いてきた声にルクスリアは驚いた。

「そう君の頭に直接話しかけているのだ。……さて、君も非常に珍しい。どの寮に行っても君は成功するだろう。その右目の力を含めてな。君はどの寮を望む？」

「私が決めていいの？」

「そうだ。君はどの寮に進んでもその寮にあつたものを活かす事ができる。そうなると大事なものは、君がどの様になりたいかだ。さあ、ルクスリア、君はどこを選ぶ？」

「私……私は………」

「私は今まで、ずっと隠れて生きてきた。魔眼のせいだとわかったけど、でも、そんな生き方はもう終わりにしたい。まだ、力を制御できないから顔は隠すけどそれ以外は隠したくない。力だつていつかは制御してみせる。そして、それを含めてルクスリアとして胸を張って生きていきたい。だから、私は、踏み出す勇気が欲しい!!」

ルクスリアは心のなかで叫んだ。今までのような生活はしたくない。でも、隠さなくするのはとても怖い。今の自分に必要なものは

何か。その答えに辿り着いた。

組分け帽子はルクスリアの叫びを聞き、優しく語りかけてきた。「それが、君の意志だね。よろしい。君のその意志があればきつと望んだものは手に入るだろう。」

「グリフィンドール!!」

組分け帽子の声が響き渡った。グリフィンドールから拍手が沸き起こり、ルクスリアを歓迎してくれた。帽子を置き、テーブルへ向かうとハリーとロンが迎え入れてくれた。

「おめでどうルクスリア!!」

「ありがとう二人とも。七年間よろしくね。」

ルクスリア達が喜びを分かち合っていると、ダンブルドアが、檀上にたった。

「新入生諸君、入学おめでどう。話をしても良いのじゃが、そんなことよりも腹を満たさねばな。」

ダンブルドアは茶目つ気たつぷりに笑いながら、指を鳴らすと今まで何も無かったテーブルにたくさん料理が並んでいた。

孤児院育ちのルクスリアには、見たこともない料理がたくさん並んでいる。ルクスリアは気になったものの全部を食べ始めた。

黙々と食べていると、グリフィンドールの先輩達がやってきて自己紹介してくれたが、皆食べるのを止めなくていいと言ってきたため、そんなにがつがつしている様に見えたのかとルクスリアは恥ずかしくなった（実際は皆ルクスリアの唇が気になっていた）。ハリーとロンも目を奪われていたが、途中でルクスリアがいつまでも食べ続けていることに気がつき笑顔がひきつった。

「こんなにたくさん食べてもいいなんてすごい幸せ。そう言えば、私って皆が言うお腹いっぱいって状態になったことないなあ。」

結局ルクスリアは、ダンブルドアが料理を消すまで、ひたすら食べ続けていた。流石に他の生徒も気がつき、唇どころではなくなっていた。ルクスリアが突然消えた料理にショックを感じていると、ダンブルドアが再び立ち上がり話し始めた。

「皆良く食べ腹も膨れたことじやろう。直ぐにベッドに行きたいと思

うが、いくつか忠告しておかねばならんことがあるのでしつかりと聞くように。まず、とても痛い死に方をしたくない人は四階の鍵のかかった部屋に入らないように。」

「そんな危険な場所が学校の中にあるの!?!」

その後も他のことについての説明があり、最後に校歌を歌って解散となった。

「二年生の諸君、僕は監督生だ。皆僕についてきて。」

そう言っつて、ロンの兄であるパーシーがグリフィンドール寮まで案内した。

「皆の荷物は既に部屋に運び込んである。荷物がある場所が、自分のベッドだ。」

ルクスリアのベッドは四人部屋の一番奥であつた。メンバーはルクスリア、ラベンダー・ブラウン、パーバティ・パチル、そしてハーマイオニー・グレンジャーだつた。

四人は軽く自己紹介をし、すぐにベッドに潜り込んだ。

「今日は色々あつたな。明日からすぐに授業も始まるし頑張らなきゃ。」

「彼女はどうじゃつた?」

「あの子は自分自身でグリフィンドールを選んだ。恐らく悪い方には

「いかないだろう。」

「そうだといいんじやがな。魔眼はどうじゃった？」

「非常に強力だが、効かない者には全く効かないようだ。」

「どういう人間には効かないんじや？」

「そこまでは分からん。だが、あの男には効かなかったのは知っているだろう。」

「なるほどのう。だが、わしの推測が正しければわしが見るのは危険かもしれない。」

「しばらくは、様子をみた方がいいだろう。」

「分かっている。彼女が予言のどちらに転ぶか。正しい方に転ぶように導かねばな。」

授業

新しい朝が来た。希望の朝だ。

窓から差し込んでくる日の光を感じ、ルクスリアは目を覚ました。慣れていないベッドのはずなのに、使い込んだベッドの様に安心感があり、ぐっすりと眠ることができた。時計を見てみると、どうやら少しだけ早く起きてしまったようだ。二度寝をして、初日から寝坊するのもまずいので、ベッドを出ることにした。

同室の三人は、まだ眠っているようなので起こさないように部屋を出て、大広間へと向かい、今日の授業の予習を始めた。

しばらくすると、徐々に他の生徒も起きてきたようで、大広間がざわついてきた。

「おはよう。あなたって朝早いよね。起きたら貴女だけいないからビックリしちゃった。」

「おはようハーマイオニー。……余計なお世話かもしれないけど、後ろ髪が凄く跳ねてるよ。」

ハーマイオニーはかなりの癖毛のようで後ろ髪がピョンピョンと跳ねていた。

ハーマイオニーはルクスリアの正面に座り、パンにマーマレードを塗りたくりながら答えた。

「どうしても跳ねちゃうのよね。ずーっとこんな感じなの。直らない日はずっとこのままよ。ルクスリアこそ髪の毛けっこうウェーブかかって長いのに、なんでそんなに纏まるのよ。」

ハーマイオニーの疑問にルクスリアも疑問に思った。自分の髪もストレートではなく、波打っているような感じだ。しかし、幼い頃から寝癖がついたことは一度もない。

「私、なぜか寝癖がつかないの。朝起きたらもうこんな感じだよ。」
「羨ましいわ。朝、髪の毛に時間とられるの結構辛いよね。」

そのまま二人は髪の毛の話や授業への期待を話しながら食事をし、授業へと向かった。

変身術

変身術の教室に入ると、マクゴナガルはおらず、机の上に猫が一匹座っているだけだった。不思議に思いながら席につき授業開始の間になった。しかし、マクゴナガルは現れず、教室内はざわざわしていた。すると、突然猫の体がグニヤリと歪みそのまま巨大化し始め、変化が終わるとそこにはマクゴナガルが立っていた。

「変身術を担当しますマクゴナガルです。授業開始の時間になったら、教員がおらずとも静かにするべきではないでしょうか？」

その発言で教室中が静かになった。

「よろしい。今日から授業が始まりますが、まずは、変身術の基礎として、マツチ棒を針に変えてもらいます。さて、何故変身術の基礎としてこれを行うのかわかる人はいますか？」

マクゴナガルの質問にグリフィンドール生は互いの顔を見合い、誰か答えられる人はいないか探した。そんな中で、ハーマイオニーだけは腕をピシッと上げ自信に溢れた顔をしていた。

マクゴナガルがハーマイオニーを指名すると、まるで教科書を音読しているかの様に、説明し始めた。

「変身術はその対象が大きくなればなるほど難易度が上がります。また、非生物よりも生物を変える方が難易度が高いです。さらに、姿形

が類似している方が変化した後をイメージしやすく難易度は下がります。なので、小さくて形が似ている物ということで、マッチ棒を針に変えることが基礎なんです。」

「完璧です。予習をしつかりとしているのですね。グリフィンドールに5点あげましょう。それでは、練習を始めてください。」

マクゴナガルの合図に、皆一齐に魔法を唱え始めた。ルクスリアは呪文を唱えることが初めてであったので、すぐには唱えず様子を窺うことにした。

皆なかなか変えられず苦戦していた。中には何故かマッチに火がついてしまう生徒や爆発させている生徒もいた。ルクスリアは皆ができていないのを見て安心し、マッチ棒を見つめた。

「コツは頭の中に、変化した後のものをイメージすること。……マッチ棒の赤い部分が針の先に、色は金色で、長さはそのままで、太さはもつと細く……」

ルクスリアはゆつくりとイメージを固め、そして呪文を唱えた。「あれ、できちゃった。」

さっきまでマッチ棒であったものが、見事にイメージ通りの針になっていた。それに気づいたマクゴナガルが近づいてきた。

「素晴らしいです、ルクスリア。グリフィンドールに5点あげましょうか。皆みてください。彼女はたった一回で成功させました。大事なのはイメージです。何度もチャレンジするのもいいですが、落ち着いてゆつくりとやるのも一つの方法ですよ。」

結局この日できたのは、ルクスリアとハーマイオニーだけだった。

魔法薬学

魔法薬学の教室は、ルクスリアからすればまさしくそれっぽい部屋だった。暗くジメジメとしている教室に、何かのホルマリン漬け、コポコポと音をたてているガラス瓶にグツグツと何かを煮ている大釜等が置いてあるが、何故か不思議と清潔さがあつた。

魔法薬学の授業はグリフィンドルとスリザリンの合同授業で、犬猿の仲である両寮生徒はピリピリとしていた。時間になると、スネイプがやってきて、出席を取り始めた。

「ハリー・ポッター……ああ、我らが新しいスターだね。」

スネイプはハリーの名前を呼ぶと、皮肉をたっぷりと込めた笑顔で言った。

出席を取り終わるとスネイプは、魔法薬学について語り始めた。「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と、厳密な芸術を学んでもらう。このクラスでは杖を振り回すような馬鹿げた事はやらん。これでも魔法かと思う者も多いかもしれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち上る湯気、人の血管の中をはいめぐる液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力…… 諸君がこの素晴らしさを完全に理解することは期待してはおらん。我が輩が教えるのは、名声を瓶詰めにし、栄光を醸造し、死にさえ蓋をする方法である。もつとも、我が輩がこれまで教えて来たウスノロどもより諸君がまだましであるならの話だが」

その後、スネイプが再びハリーをいびつた後に作業が始まった。最初ということもあり、単純なおできを治す薬を作ることになった。

「前に書いてある手順に従えばいいんだよね。」

ルクスリアはハーマイオニーとペアを組み、作業を始めた。ルクスリアとハーマイオニーは初めてとは思えない速さと正確さで、すぐに完成させた。

「思ったよりも簡単だったわ!! 初歩中の初歩でしょうけど、私たち、皆よりはよっぽどできるわね!!」

ハーマイオニーが自信に満ち溢れた顔で話しかけてきた。ハーマイオニーの多少傲慢な言い方に、ルクスリアは釘をさした。

「思ったよりも簡単だったのは私も思うけど、皆よりできるかどうかはまだわからないよ。皆不慣れなだけかもしれないし。すぐに作業に慣れてくるよ。……とりあえずできた薬をスネイプ先生に見せようか。」

そう言うと、ハーマイオニーは不機嫌になった。ルクスリアは挙手をしスネイプを呼んだ。

「何か質問かね?」

「いえ、私たちはもう完成したので、見ていただけたらと。」

「もう完成したのかね。……ふん。初めてにしては合格だろう。どうやらルクスリア、君には魔法薬のセンスが有るのかもしれないな。」

スネイプはハーマイオニーを完全に無視しルクスリアだけを褒め、他の生徒の様子を見に行った。

飛行訓練

授業が始まって数日後、飛行訓練が行われることになった。そのことを知ったルクスリアは、スネイプの所へとんでいった。スネイプは

魔法薬学の教室にいた。

「スネイプ先生、飛行訓練の際に前髪が風に煽られて魔眼が見えてしまう可能性があるのですが大丈夫でしょうか?！」

「……君に渡した魔眼殺しの眼帯は、非常に貴重でかつ強力なものだ。この短期間でそれを突破するほど魔眼の力は増していないだろう。それに、君は前髪で顔を隠しているが、常に隠せているわけではなからう。ふとした時に、髪の間隙から見えていることもあるはずだ。だが、今のところ問題はない。飛行訓練には何も支障はないはずだ。分かったのなら行きたまえ。我輩はこう見えて忙しいのでね。」

そう言って、スネイプは話は終わりだと言わんばかりに、仕事に戻っていった。

そして、飛行訓練当日、またもグリフィンドールとスリザリンの合同授業ということで、せっかくの飛行訓練であるのに、またもやピリピリとしていた。

飛行訓練場に行くと、箒が地面に規則正しく並べてあり、その中心に鷹のような鋭い目を持つ女性、マダム・フーチが待っていた。

「何をぐずぐずしているのです!!早く箒の横に立ちなさい!!」

マダム・フーチがいきなり叱咤してきたため、皆急いで箒の横に立った。

「箒の上に手をかざし、『あがれ』と言いなさい。箒が手の中におさまるはずです。さあ、始めなさい!!」

合図で皆一斉に始めた。ルクスリアもやってみると、箒は手の中におさまった。

「本当にあがったよ。結構簡単なんだなあ。」

周りを見ると、できている生徒はハリー、マルフォイ、ルクスリアだけだった。ハーマイオニーの箒は動いてはいるのだが、中々手の中に収まらないようだ。ロンの箒は地面をコロコロと転がっているだけで、一番酷いネビルは箒がピクリともしていなかった。ようやく箒が手におさまったハーマイオニーは、周囲を見て既にできている人がいることにとっても悔しそうだった。

全員がようやく箒を持ったところで、マダム・フーチは新たな指示

を出し始めた。

「それでは、箒に跨がりなさい。私が合図をしたら、地面を強く蹴って飛んでください。ただし、高く飛びすぎてはダメですよ。三、二」「うわああー！助けてー！」

マダム・フーチの合図が出る前に、緊張していたのか、ネビルは先に飛び上がってしまった。コントロールができないようで、フラフラとどンドン高度を上げていく。

「ロングボトム戻ってらっしやい!!」

マダム・フーチも緊急事態に混乱しているようで、右往左往している。ネビルはどンドンと校舎に近づいていき、このままでは激突して箒から投げだされてしまいそうだった。

「あんな所から落ちたら、最悪死んでしまう!!助けなきや!!」

ルクスリアは、ネビルを助ける方法が何も浮かんでいないにも関わらず、ネビルを助けようと杖をネビルの方に向けた。すると、習ったことも聞いたこともない呪文が頭の中に浮かんできた。ルクスリアは迷わずその呪文を唱えた。

『クリシエレ・アーボリビス!!ー樹木よ生えよ!!ー』

ルクスリアが呪文を唱えた瞬間、地面からネビルめがけて木が生えていき、今まさに校舎に激突しそうになったネビルの前に届き、木に突っ込む形になったネビルは枝がクツションになって、難を逃れることができた。

ネビルの無事を確認したルクスリアは非常に強い倦怠感に襲われた。どうやら、急激に魔力を使いすぎたことによる疲労のようだった。

「何であんな呪文を唱えられたんだろう。読んだ教科書には載ってなかったのに……。もしかして杖が教えてくれたのかな？」

そう思い杖を見ると、まるでその通りだと言わんばかりに杖先に花を咲かせた。

「見事でした!!グリフィンドールに10点。私は今からロングボトムを下ろした後に、念のため彼をマダム・ポンフリーのもとへ連れていきます。」

その後、戻るまで絶対に飛ばないように釘をさしマダム・フーチはネビルを連れていった。

「ルクスリア、凄いいじゃないか!! あんな魔法を使えたなんて!!」

ハリーとロンがルクスリアの方に来て褒め始めた。すると、他のグリフィンボール生もそれを皮切りに一斉にルクスリアを褒め始めた。

「よく咄嗟に唱えられたよな。」

「あんな大きい木を生やすなんて、魔力も強いな」

「あの木はニワトコの木だな。家の庭にも生えてたけど、あんな大きいのは初めて見たよ」

ルクスリアは皆に褒められたことをとても嬉しく感じていた。どこからか、突き刺さる嫉妬の視線には気付かずに。

その後、マルフォイとハリーに一悶着ありマクゴナガルがハリーを連れていった所で授業は終了となった。

ハロウイン

ルクスリア視点

ホグワーツでの生活が始まってから、もうすぐ二ヶ月が経つかあ。この二ヶ月間はとっても幸せな日々だったな。授業は、最初は不安が強かったけど、思っていたよりずっとついていけてるし、むしろできる方みたい。グリフィンドールの生徒とも友達になれて、対等に接することができているし、何よりも呪いをかけてしまったこともない。なんだか全部が上手くいってるみたい。

ただひとつを除いては。

最初の頃は同じ部屋ということもあってか、授業の時や食事等も一緒に取っていたのに、ホグワーツでの生活が進むにつれて、私に対して変な態度を取るようになっていったんだよね。

ハーマイオニーが。

ハーマイオニーの態度が変になっていった最初の頃に気が付いて、ハリーやロンに相談したんだけど、そしたら二人に、

「君は悪くないよ。皆ハーマイオニーは嫌な奴だって言ってるしね。きつと、ハーマイオニーの被っていた化けの皮が剥がれただけだよ。」
と言われてしまった。私としてはハーマイオニーは非常に頭が良く、自分の行動がどういう結果に繋がるのか分かっていると思ってる。だから、何か私に原因があるのかと考えてしまう。

最近、私と目も合わさず（髪で隠れてるけど）、部屋で一緒になってもハーマイオニーはカーテンをしめてこもっちゃう。耳をたててみると、カリカリという音が聞こえるので、どうやら勉強をしているようなんだけど、それが深夜になっても続けているんだよね。ラベンダーとパーバティと話してみると、二人とも私と一緒にハーマイオニーを心配してて、

「最初は勉強する音が気になって腹がたっただけだし、ここまで毎晩遅くまで勉強してフラフラになってるのを見ると、流星に心配になるよね。」

「そこでさ、二人で「たまにはちゃんと寝たら？」って言ったのよ。でもハーマイオニーったら、「寝てたらどんどん遅れちゃうから。それに、負けるのは嫌なの。負けたくない。」ですって。今でも十分優秀なのに、どこを指してるのかしらね。それに、いったい誰に負けたくないのかしら。」

と言っていた。ハーマイオニーはこのままだと体を壊しちゃう。勉強するのはいいと思うけど、流石にやりすぎだよ。でも、私に対して変な態度取るし、私が言っても意味ないかもしれない。

「私、どうしたらいいのかな？」

「どうしてグリフィンドールの生徒じゃなくてハッフルパフの僕に聞くんだい？」

ハッフルパフの生徒は不思議そうにたずねてきた。

「えっと、どうしてグリフィンドール生に聞かないかと言うと、グリフィンドールの人って視野が少し狭いかなって思うの。一つの考えを信じきれると言うかさ。そういう人の意見も良いけど、もつと柔軟な考えも聞きたいなって。それに、ハッフルパフは人間関係が優れてるって聞いたからだよ。もうひとつ何故貴方かと言うと、たまたま独りで歩いているハッフルパフ生を探したら、最初に見つけたのが貴方だったからよ、セドリック。」

そう、私が相談しているのはハッフルパフの三年生のセドリック・デイゴリー。昼休みにハッフルパフ生を探していたら、良い人っぽさが滲み出ていたから声をかけた。

「なるほどね。良く分かったよ。……そうだね。君の話聞いてる限り、そのハーマイオニーって子は君に嫉妬しているんじゃないかな？」

ハーマイオニーが私に嫉妬？私の何に嫉妬してるの？

「それは、おかしいよセドリック。私にハーマイオニーに嫉妬されるような所はないよ。」

ハーマイオニーは勉強は私なんかよりも全然できるし、魔法も皆より上達が早いし、私を羨むところなんかあるのかな。

「うーん、そうなのか。………質問んだけど、君は授業で点数を貰

うことはあるかい?」

「あるよ。でも、ハーマイオニーも貰ってるよ。」

「君とハーマイオニーだったらどっちの方が貰うことが多い?」

「んー同じくらいかな。あつても魔法薬学だとスネイプ先生がハーマイオニーを無視するんだよね。」

「なるほどね。じゃあもうひとつ、君は人間関係で何か苦労しているかい?」

「この外見だから、変な目で見られることはまだあるけど、話してみたら皆気にならなくなるみたいで仲良くなれるよ。」

「ありがとう、質問に答えてくれて。さて……もう一度言うけどハーマイオニーは君に勉強のことで嫉妬しているよ。そこにライバル心もあるみたいだけどね。それに、何よりも君が自分にはできないことをしていることが羨ましいんじゃないかな?」

「それってどんなこと?」

「ハーマイオニーは恐らく人間関係を上手く築いて維持することが苦手なんだろう。だけど君は授業では同じくらいなのに、人間関係は良好だ。現に僕も初めて君と話したけど、君が良い人だというのが凄く伝わってきてるしね。」

セドリツクの言葉のおかげで、色々繋がつてきた。でも、分かってきたのはいいんだけど、こんな時どうすればいいんだろう。困った顔をしていたら(隠れてるけど)、セドリツクは察して話してくれた。「君がハーマイオニーとの関係を良くしたいなら、君がハーマイオニーを受け入れてあげるのが良いんじゃないかな?ハーマイオニーは、きつと寂しいんだよ。でも、そのことを上手く伝えられないから、逆効果な方法をとってしまってるんじゃないかな?だから、ハーマイオニーの寂しさを受け入れてあげて、君のハーマイオニーへの思いも伝えてあげれば良いと思うよ。あくまで、僕の予想通りならだけだね。」

そう言つて、セドリツクはカッコつけすぎたと呟いて照れ臭そうに笑った。彼はとても優しい人だ。初対面なのに、こんなに話を聞いてくれてアドバイスもしてくれた。なんだか、勇気が湧いてきた。

「ありがとうセドリツク!!貴方に相談して正解だったよ。私、今晚ハーマイオニーと話してみるね。貴方ってとっても良い人だね。それじゃ、バイバイ!!」

そう言つて、セドリツクと別れた。さあ、今晚は勝負だ。その為にも午後の授業を乗り気つて、それからハロウィン料理を味わつて、エネルギーをつけないとね。

妖精の呪文

「今日は浮遊術をやります。皆さんの前に置いてある羽根を浮かせて下さい。呪文はこうです。『ウインガーディウム・レヴィオーサー浮遊せよ』」

フリットウィック先生がキーキーとした声で唱えると羽がふわりと浮き上がった。発音が難しくて噛んじやいそう。

「それでは、やってみてください。」

まずは、杖を振らずにゆっくりと練習してみよう。

「ウインガーディウム・レヴィオーサー」

大丈夫そうだ。たぶん、杖を振れば成功するだろう。いつもなら、何も考えず直ぐに呪文を唱えるけど、今日はハーマイオニーが気になつちやうな。

な、なにかその羽根に恨みでもあるの？

それくらい真剣な顔で練習していた。さっきの話的には、ハーマイオニーに一番を譲った方が良いのかな？このまま杖を振らずに練習して、ハーマイオニーが成功するのを見てからの方が良いのかな？

……なんかそれは違う気がする。手を抜くのって、相手の事を凄くバカにしてる感じがするし、ハーマイオニーとの関係を良くするのなら、むしろ真剣勝負の方が良い気がする。

『ウインガーディウム・レヴィオーサー浮遊せよー』

気持ちを固めて唱えると、羽根は宙に浮き上がった。

「素晴らしい!!グリフィンドールに5点差し上げます。皆さん発音に気を付けるのですよ。」

ハーマイオニーの方を見ると、さっきまで羽根に向けていた視線が私に突き刺さってきた。怖いよ……ハーマイオニー……。

その後、近くに座ったハリーとラベンダーにコツを教え（二人とも少し浮いた）、授業は終了した。

「ラベンダー、私先に大広間に行くからまた後でね！」

「分かったわ。私は荷物を置いてから行くからまた後でね。……食べ過ぎないようにね。」

凄くカボチャだ。全部カボチャだ。食べ物も飲み物も大広間の飾り付けもカボチャだ。いくらハロウィンだからって、拘り過ぎじゃないかな？まあ、美味しいから良いんだけどさ。

ハロウィンということもあってか、皆普段よりもワイワイと騒いでいる。あつ、ラベンダーとパーバティが来た。手を振ると気付いたようにで私の方に来た。

「凄く、カボチャね。」

「そうなんだよ。でも、どれもみんな味が少しずつ違うから、思ったよりもいけると思うよ。」

「貴女は何時だつていけるじゃない。」

なんかラベンダー達に呆れられてる気がする。やっぱり食べ過ぎなのかな？

「私って食べ過ぎ？」

「もちろん」

二人は息をピッタリと合わせてきた。そんな、当然よ!!、みたいな顔しなくても良いじゃん。

「なのに、なんでそんな細いのよ。羨ましいわ。いったい栄養は何処にいつてるの？」

「分かんないよそんなの。私、成長はするけど、どれだけ食べても食べなくても太ったり痩せたりしたことなんてないよ。」

そういえば、呪いのせいで部屋に閉じ籠って、一週間位ほとんど食べなかったのに、痩せたりしなかったな。なんでだろ？魔法？

そんなことを考えていると、大広間にハリーとロンが入ってくるのを見つけた。ラベンダーとパーバティも見えていたように話始めた。

「さっきのロンは流石にひどかったわね。」

「そうね、流石にね。」

「何かあったの？」

「そっか、貴女はすぐに教室を出たもんね。実は、ロンがハーマイオニーの悪口を言ったのよ。それをハーマイオニーが聞いてちゃってさ。もうちよつと言う場所を考えて欲しいわよね。」

「ハーマイオニーはそれを聞いてどうしたの？」

嫌な予感がする。

「泣きながら走っていったわ。私達が追い掛けたんだけど、地下にあるトイレに籠ってしまったのよ。」

のんきに食べてる場合ではなかった。今夜話そうと思ってたが、今すぐ行った方が良いんじゃないだろうか。

「ちよつと私ハーマイオニーの所へ行ってくる。何時帰るか分からな
いから、私とハーマイオニーの分、食べ物持って帰れたらそうしてく
れると嬉しいな。」

よしハーマイオニーの所へ行こう。地下のトイレは向こうかな？

あ、通りすがりにロンの頭をひっぱたこう。

スパーンと良い音があった。睨んできたけど無視無視。

ハーマイオニー視点

地下のトイレ

何も変わらないわ。マグルの学校にいた時から。真面目にやればやるほど皆離れていく。なんで、真面目にやってる私が損をして、不真面目な人が得をしてるのよ。絶対におかしいわ。

違う。そうじゃないのよ。こんなのただの言い訳よ。本当は私の皆への接し方が悪いのよ。どうしても、きつい言い方になっちゃう。さつきだって、ロンが陰口を言っていたのは、私が悪いからってこと

は分かっているの。もっと、優しく教えてあげれば良かったのに、どうしても喧嘩腰になっちゃって、キツイこと言っちゃって、嫌がられちゃって、その後彼の挑発にのって、当然の様に私が魔法を成功させて、どうだと言わんばかりにロンを睨み付けて、嫌味たっぷりな奴って思われるわよね。

何もしていないと、ずっとこんな後悔が頭の中を反芻しちゃう。勉強に集中してる時だけは気にしないでいられるから、どんどん勉強の時間が増えて、他の人との関わりは減って、心配だけかけて。でも、やめたら苦しいから、また勉強して。

こんなことをしてたら友達なんて出来ないわ。

なんで、私は彼女の様になれないのかしら。授業での点数とかは同じくらいなのに、見た目が不思議なのに、同じマグル生まれなのに、なんで彼女はあんなに皆に受け入れられるんだろう。

羨ましい。

羨ましくて、つらくて、無視しちゃうてる。本当は仲良くしたいのに。ルクスリアと。

コツコツと靴の音が聞こえてきた。

どんどん近づいてくる。

足音が私の入っているトイレの個室の前で止まった。

「ハーマイオニー？私だよ。ルクスリアだよ。」

全身に緊張が走った。

ルクスリア視点

このドアの向こうにハーマイオニーがいる。一度深呼吸をして覚悟を決めよう。……よし、

「ハーマイオニー？私だよ。ルクスリアだよ。」

「……何の用なの？ほっというて!!」

ハーマイオニーの声だ。ずっと、泣いていたのか声が震えている。

「私、貴女とお話ししたくて来たの。ドアを開けて。」

「嫌よ。話があるならこのまま話して。」

本当は顔を見ながら話したかったけど仕方ないか。話は聞いてくれるみたいだしね。

「じゃあ、このままでもいいよ。あのね、私ね、貴女ともっと仲良くなりたいの。」

ハーマイオニーの気配が変わった。

「私ね、初めてホグワーツの生徒でお話した女の子ってハーマイオニーなの。最初は貴女のこと、知識ばっかの子って思ってたんだけど、それから貴女とお話する内に、そんな事無いんだって思ったの。そしたら、もっと、貴女と仲良くなりたいと思ったんだけど、ハーマイオニーが私を最近避ける様になって、寂しいんだ。私、ハーマイオニーが私のことどう思ってるのかも知りたい。」

ハーマイオニーは何か葛藤しているような、そんな感じに変わった。

「貴女のことを教えて。ハーマイオニー。」

ハーマイオニーはかなり迷っている様子だ。私は静かに待とう。

ガチャン

鍵が開いた音がした。

真っ赤に泣き腫らした顔で、それでも、何か期待したような顔でハーマイオニーが出てきた。

「私の話を聞いてくれるの？」

「もちろん!!」

ハーマイオニーは深呼吸をし、覚悟を決めた目になると話始めた。「私ね、貴女が羨ましかったの。色々共通点があるのに、貴女は皆と仲良くできてるわ。なのに、私にはそれはできないの。それが羨ましくって、貴女に冷たくしたり、変に勉強で勝とうとしてしまったの。」

「ええ、そうよ。だって私、本当は、貴女と仲良くしたいのよ。」

「本当？嬉しい!!」

「でも、私、口が悪いし、頭固いし、皆と仲良くするの苦手だし、それでも良いの？」

「全然大丈夫だよ。ハーマイオニーが直したいところとか苦手なこととかあるんだったら、私が手伝うよ。」

私の本心を言った。なんだか、凄く恥ずかしいことを言った気がするけど、今はどうでもいい。ハーマイオニーは、私の言葉を噛みしめているかのように下を向き、そして、私の方をみた。

……何故か、視線が私の後ろを見ている。そして、魚の様に口をパクパクとさせながら、指で私を指してきた。

「ル、ルクスリ、ア……後ろ……」

ハーマイオニーの様子にただ事じゃないと思つて後ろを振り向いたら、何か巨大な化け物がいた。

くすみにくすんだピンク色の肌をした巨体の上に申し訳程度に小さな頭がある。顔は何も考えていなそうな間抜けな顔で、豚の様にブーブーと鳴いていて、右手には私なんかよりもずっと大きい棍棒を持っている。

こちらを見てきた。どうやら、獲物としてロックオンされてしまったみたいだ。

「に、逃げなきゃ!!ルクスリア、逃げよう!!」

ハーマイオニーが悲鳴をあげている。私だって逃げたい。でも、逃げらつたつてあの化け物は入口にいて、地下にあるこのトイレに他に外に逃げる道はない。

戦うしかない。

「任せて、ハーマイオニー。私が貴女を守るから。」

私は杖を抜いた。杖から任せろと言わんばかりにやる気を感じる。杖に意思ってあるの？

私の言葉を聞いて理解したのか、ただうるさく感じたのかわからないが、化け物は棍棒を高く上げ、私達に振り下ろしてきた。

『プロテゴ―護れー』

ギャキーン

化け物の棍棒は、振り下ろしている途中で、見えない壁にぶつかり止まった。思い切り振り下ろしていたためか、化け物は腕を痛めたように、棍棒を落としてブーブー叫んでいる。叫びながらも今度は体当たりをしてきた。

『プロテゴ―護れー』

再び呪文を唱える。化け物は壁にぶつかるとそのまま壁を壊そうと何度も殴り付けてくる。魔法を解いたら私達はミンチになってしまう。このまま助けが来るまで耐えなければ。

「ルクスリア、ハーマイオニー大丈夫か?!」

声のする方を見ると、ハリーとロンが助けに来てくれたようだ。

「誰でもいいから先生を呼んで!!」

そう言いながらも私は必死に盾の呪文を維持する。

ロンが何故か、杖を構え始めた。ハーマイオニーは何かを察したように、叫んだ。

「ビューーン、ヒョイよ!!」

『ウインガーディウム・レヴィオサー浮遊せよー』

ロンは化け物の棍棒を浮かせ、それを化け物の小さな頭に落とすた。

ドガツ

鈍い音がして、化け物は倒れた。

良かった。危機は脱したみたいだ。

ハリーとロンがこちらに走りよってきた。

「ありがとう二人とも。おかげで命拾いしたよ。」

「二人が来てくれなかつたら、正直盾の呪文が持つかどうか怪しかったよ。ありがとう。」

「ルクスリア、君盾の呪文が使えるのかい?!」

ロンが非常に驚いた顔で私を見てきた。答えようとすると、バタバタと足音が近づいてきた。

「貴方達、これは一体どういうことなのですか?!」

マクゴナガルとその他の教員がやって来た。

どう説明しようか悩んでいると、ハーマイオニーが話始めた。

「私、ここで泣いていたんです。ここなら、人があまり来ないので。もしたら、ルクスリアが泣いている私を探しに来てくれて、私の話を聞いてもらっていたら、突然あれがやってきたんです。」

「あれとはトロールのことですね?」

マクゴナガルは化け物を見ながら言った。なるほど、あれがトロールなんだ。

「はい、そうです。トロールが襲ってきて、もしたら、ルクスリアが、盾の呪文で守ってくれたんです。」

「二年生が盾の呪文を使ったと言っているのですか?!」

これには、教員達は驚いたようだ。ダンブルドアとスネイプ先生を除いて。答えを求められている様な視線を感じたので呪文を唱えた。

『プロテゴ―護れー』

「……完璧です。既に下手な大人よりも強固な守りのようですね。すみません、話が脱線しました。どうぞ続きを。」

「ルクスリアが守ってくれている間にハリーとロンが助けに来てくれて、トロールを倒してくれたんです。」

ハリーとロンは居心地悪そうにしてる。助けくれたのになんてだろ?」

「……事情は分かりました。ひとりにつき5点差し上げましょう。……その幸運にです。では、貴方達は寮にお戻りなさい。」

そうやって、マクゴナガルは私達を解放してくれた。帰り道、四人とも無言のままだった。

グリフィンボールの談話室にやつと着いた。流石に疲れたよ。私がソファに座り一息ついていると、ロンがハーマイオニーに話しかけた。

「ハーマイオニー、その、今日はあるなと言ってごめん。許して欲しい。」

「私こそ言い方がキツくてごめんね。」

二人は互いに謝りあっている。どうやら、仲直りできたみたいだ。ハリーと視線が合い、お互いに笑いあった。

その後、ハリーとロンは部屋に戻っていった。二人がいなくなったのを確認すると、ハーマイオニーは話しかけてきた。

「ルクスリア、あの時の続きを話すわね。えっと、私、こんな人間だけが友達として仲良くしてくれる?」

その言葉を聞いて疲れが何処かに吹き飛んだ。

「もちろん!!これからもよろしくね。」

私達はお互いに笑いあった。その後、ラベンダーとパーバティから取っついて貰った食べ物で二人で食べ、お話をしてからベッドに潜った。やはり、体は疲れていたようで直ぐに意識は遠くなっていた。

「まさか、既に盾の呪文を使えるとはのう。」

「彼女は非常に優秀です。どの科目でも上位に入ります。また、木を生やすなど高度な魔法も使用しています。」

「なるほどのう。このまま、見守るだけでは危険かもしれんな。……すまんが、頼みがある。」

「なんででしょうか？」

「彼女に個人レッスンをさせてやってくれんか？変に他の魔法を修得されるよりも、こちらである程度コントロールした方が良いかもしれん。」

「……承知しました。」

クイディッチ

ルクスリア視点

「クイディッチだ!!」

普段は少し気だるげなロンが、眼をキラキラとさせて興奮してる。いきなりどうしたの、ロン。少し落ち着いたら?」

「これが落ち着いていられるか!!明日は今シーズン最初の試合で、しかも因縁のスリザリン戦だぞ!!それに何よりハリーの初陣だ!!友達に僕らが応援しなきゃ!!」

「クイディッチってそんなに……いや何でもない。」

クイディッチの面白さを聞いたら最後延々と語られそうだ。私は今のところ興味ないので、そんなのはごめんこうむる。ハリーの方を見ると、顔を青くしていた。どうやら、とても緊張してるみたい。

「ハリー、私はクイディッチのこと良くわからないけど、あなたなら大丈夫だよ。」

「そうよ。ハリーあなたなら大丈夫よ。」

私とハーマイオニーが励ますとハリーは力なく笑った。こりや重症だ。どうにかしてあげたいけど、これはハリーが乗り越えるべきことだろう。

「とりあえず、今日はいっぱい食べていっぱい寝るしかないね。さあ、大広間に行こう。」

そう言って三人を引き連れて大広間へと向かった。

「おはようハリー。今日もいい顔色してるね。」

「おはようルクスリア。朝から辛辣だね。」

ハリーは昨日と同じく顔を青くしていた。どんよりとしており、不安の強さが滲み出ている。ロンは既に席を取りにいつている。いくらなんでも早すぎじゃない？一方ハーマイオニーは寝癖と格闘していたので、部屋においてきた。

「おいおい、我らがシーカーをそんなにいじめないでやってくれ。」

「そうそう、ハリーには活躍してもらわなきゃならないんだからな。」

声とともに両肩に均等に重さがかかる。……奴等か。

「いつも言うけど貴方達近すぎ。それにいじめてるんじゃないからなくてジョークだよ。」

ロンの兄である双子のフレッドとジョージだ。一回少し話した時に、何故か気に入られ（呪いはかかってないはず）その後はセクハラ一歩手前の過剰なスキンシップをしてくることがある。といっても、髪を触ったり肩に手をのせたりで、一定のラインは守っているので彼らの個性として受け止めている。

「だって、君から凄く良い匂いがするんだぜ。」

「それに髪の毛の触り心地も最高だしな。凄く落ち着くんだよ。」

「言ってる内容がただの変態だよ。」

いつものことなので別にいいけどさ。

「と言うことで、ハリーにもルクスリアの髪を触らせてやってくれ。」
「きつと、心が落ち着ついて緊張がほぐれると思うんだ。」

何を勝手なことを言っているのだ、この双子。なにが、「と言うことで」だ。……しかし、珍しく眼が真剣だ。どうやら、本気で頼んでい
るらしい。そう言えば二人ともクイディッチの選手だったっけ？

ハリーには活躍して欲しいのか。

そんなハリーを見てみると、いきなりの提案に驚いていたようだ

が、チラチラと髪を見ている。……どうやら触ってみたいようだ。同室の三人も良く触ってくるし、私自身も触り心地はいいと思ってる。

まあ、今回は本当に困ってるみたいだし、特別に許すか。

「分かったよ。だから、三人ともそんな顔をしないでくれる？まるで、棄てられそうな子犬みたいだよ。」

「えっ、本当に良いの？」

何故聞き返すのだ、ハリー。

「良いよ。その代わり……痛くしないでね？」

そう言った途端、三人の様子が変わった。いや、三人だけでなく周りの男子生徒の殆どが変な顔をしている。こう、無理矢理何かを押し付けられているような。

「なんて、破壊力だ。」

「朝っぱらこんな気持ちにさせるなよ。」

「ごめん、ちよつとトイレいってくる。探さないでくれ。」

そんな会話が聞こえるが何の話をしているのかさっぱりわからない。

「じゃあ、ハリー、ルクスリアがせっかくこう言ってくれてるんだからさ」

「触らして貰いなよ。」

ハリーは悩んだようだったが、意を決したようで私の後ろに回った。

そして、やや固い手つきで触り始めた。

どうやら気に入ったようで、触る手の力がどんどん緩んでいった。

周囲から好奇の目が向けられているが気にしない。気にしたら、おしまいな気がする。

5分程でハリーは触るのをやめた。凄く名残惜しそうな顔だったが、そろそろグラウンドに行く時間らしい。

「ありがとうルクスリア。その、すぐく……安心できたよ。」

ハリーは本当に安心したようで、顔色が良くなっているし、さつきまでの不安がみられなくなっていた。

「それは、良かった。……言つとくけどその双子みたいいきなり触るような人にはならないでね。試合頑張つてね。」

そう言うと、三人はグラウンドに向かつていった。途中双子が振り返り「ありがとう」と口パクで伝えウインクをしてきた。そういうところがあるから憎めない。

何だか凄く疲れたけど、とりあえずご飯を食べよう。ところで……ハーマイオニーはいつまで寝癖と戦ってるんだろう？

その後、見事寝癖に勝利したハーマイオニーと合流し、試合会場へ向かい、ロンと合流した。ロンは早く場所を取りに来ていただけあつて、とてもいい席で待っていた。

会場は既に熱気に包まれており、皆がどれだけ楽しみにしていたのかが良くわかる。特に、今日対戦するグリフィンドールとスリザリンは最早殺気だっている生徒すらいる。

「クイディッチを凄く楽しみにしてたのってロンだけじゃなかったんだね。」

「そりやそうだよ!! ルクスリアは僕をなんだと思つてたんだい?!」

そんなやり取りをしているとハグリッドが来た。何度かハリー達に連れられて、彼の家に遊びに行ったことがあるから顔見知りだ。……ハグリッドが、こんなにいい席に来たら後ろの人が見えなくなつ

ちやうんじやない？

その後、ロンとハグリッドからクイディッチの見所を教えてもらって（聞かされて）いると、選手達が入場してきた。

「良かった。ハリーは緊張が解れてるみたいね。」

「こんなに効果があるとは思わなかったなあ。」

「え？ルクスリア、ハリーが緊張を解した方法を知ってるの？」

「知ってるも何も私が協力（？）したんだよ。」

「ナイスだよルクスリア!!これで、グリフィンドールの勝ちで決まりだ!!」

ロンは更にテンションが上がってるみたい。そのうち、爆発しそうだ。

選手が位地につくと、ボール（クアツフルというらしい）が投げられ試合が始まった。

序盤はグリフィンドールが優勢だった。だが、スリザリンの反則スレスレのラフプレーによって、徐々に勢いを削がれていき、その差が縮まりつつある。両シーカーは未だにスニッチ（？）を見つけられず、忙しなく視線をあちこちに向けている。

「い、いったいどうしたんだよハリー?!」

ロンが悲鳴のように声をあげた。ハリーを見ると、箒が暴れハリーを振り落とそうとしている。

「あれって箒の故障？」

「いや、箒には強力な魔法がかけられているから、故障なんてありえねえ。特にハリーの箒はニンバス2000だ。誰かが呪いでもかけてるのかもしれない。」

呪い。途中から暴れ始めたということは、呪文よりも詠唱タイプの呪いかな？そう当たりをつけて周囲を見回して見る。

いた。

詠唱している人が二人いる。

一人はハリーを毛嫌いしているスネイプ先生。もう一人は………クイレル先生だ。

クイレル先生は普段からは想像がつかないほど、憎しみの籠った顔

で詠唱している。スネイプ先生は普段と変わらずポーカーフェイスで唱えている。

呪いをかける時には、呪文を唱えたりするだけでなく、感情も重要な要素だ。特に、相手に危害を加える様な呪いには、負の感情が不可欠であるらしい。

犯人はクイレル先生か。

何故、クイレル先生がそんなことをするのかは、全く分からないが、とにかく状況から犯人であるに違いない。

スネイプ先生は反対呪文で対抗しているのだろう。

「スネイプだわ!! スネイプが呪いをかけてるのよ!!」

ハーマイオニーが叫んだ。

「違うよハーマイオニー。スネイプ先生はむしろ対抗呪文でハリーを守っているよ。呪いをかけてるのはクイレル先生だよ。」

ハーマイオニーは私の言葉を疑いつつもクイレル先生を確認している。

「ホントだわ。ルクスリアの言うとおりによ。けど、どうしてクイレル先生がこんなことをするのかしら?」

「二人ともそんなことは今はどうでもいいから、呪いを止めてくれ!! このままだとハリーが振り落とされちゃうよ!!」

ロンの言うとおりに。原因究明よりもとりあえず、現在起こってる問題を解決しなきゃ!!

「詠唱タイプだから、視線を逸らせれば呪いは解けるはずだよ。」

「なら、私に任せて。」

そう言っつて、ハーマイオニーは走っていった。少しすると、クイレルのローブが燃え始めた。クイレルは燃えていることに気がつき、視線を外した。良かった、ハリーの箒が大人しくなった。スネイプ先生も呪いが解けたことに気づいたようだ。

「うまくいったわ。」

そう言っつてハーマイオニーが戻ってきた。

「流石だよハーマイオニー。」

「あつ、ハリーが動いたよ!!」

見てみると、ハリーとスリザリンのシーカーがほぼ同時に動き、スニッチを追っているようだった。ハリーは華麗な箒捌きでスリザリンのシーカーを振り切ると、スニッチを取ろうとして、箒から転げ落ちた。

「ハリーったら大丈夫かしら?」

「何か苦しそうだよ。」

ハリーは苦しそうにキラキラとしたものを吐き出した。スニッチだ。

そこで試合終了のホイッスルが鳴り、グリフィンドールが勝利した。

試合終了後、グリフィンドールの談話室は御祭り状態だった。何処から持ってきたのかは分からないが、食べ物や双子が持ってきてくれ、皆でワイワイと今日の試合について話している。主役はもちろんハリーだ。

ハリーは皆にもみくちゃにされながらも祝福され、満更でもなさそうだ。私は、少し離れたところでハーマイオニーと一緒にその光景を眺めている。正直、熱気が凄すぎてハリーの初勝利を祝いたいけど、あそこに入っていくたくない。

ロン? ずっと、中心で騒いでるよ。

しばらくすると、ようやく談話室が落ち着いてきて、大半の生徒が寝室へと戻っていった。すると、ハリーが私達の方にやって来た。「ありがとうルクスリア。君のおかげでリラックスして試合に挑めたよ。」

「それは良かったよ。……言っておくけど次はやらないからね。」

そう言うと、非常に残念そうな顔をされた。いや、男の子が女の子の髪のを触るのって、変だからね。恋人同士ならともかく、私とハリーは全くそんな関係ではないからね。

そう言えば、何故、クイレル先生はハリーに呪いをかけてたんだろう？

スネイク視点

「ルクスリア、君は残りたまえ。」

「えっと、何かご用ですか？」

魔法薬学の授業が終わり、帰ろうとしていたルクスリアは不思議そうに此方を見てきた。

「君は愚鈍なグリフィンードル生の中では珍しく魔法薬学の才がある。なので、個別で授業に関して話があるのだ。」

そう言うと、ポッターとウィーズリーが睨み付けてきた。全く、忌々しい顔だ。……眼さえりりーのものでなければ憎みきたものを。おいグレンジャー、そんな「私もできますよ!!」と言いたげな顔

で見えてくるんじゃない。

「分かりました。三人とも先に行つて。また後でね。」

ルクスリアがそう言うのと、三人は渋々と出ていった。どうやら、三人の手綱をしっかりと握っているようだ。入学前はまともにコミュニケーションをとったことがなかったはずだが、生まれながらにコミュニケーション能力は高いようだな。

さて、他の生徒も出ていったか。

「それで、お話つて何でしょうか？」

「君は先日の特ロールの一件で盾の呪文を使ったと言つたな。どうやって修得した？」

「私の杖はオリバンダーさんによると、守りの呪文に最適だと言われました。なので、守りの呪文にはどんなものがあるのかを図書館で調べていたら盾の呪文を見つけました。盾の呪文は守りの魔法の基本と書いてあったため、試してみたら修得できたんです。」

嘘はついてはいないようだな。いや、嘘をつけるほど器用ではないか。

「なるほど、本当に君は優秀なようだな。盾の呪文は基本的な守りの魔法だが、成人でも修得出来ない者の方が多い。」

ルクスリアは誉めたため喜んでいるようだ。そういうところは年相応か。

「だが、その優秀さが危険を招くこともある。魔法の中には扱いが難しく失敗すると術者自身にも危害を加えることもあり、最悪命を落とす。しかし、学ぶことを止めろとは言えん。そのため、我輩が個人的に君に魔法を教えることにした。」

「なるほど、分かりました。でも……スネイプ先生に不満があるわけではないのですが……何故寮監であるマクゴナガル先生ではないのですか？」

「理由は二つある。まず、ミネルバが君の魔眼を見ても呪いにかからない保証がないためだ。魔眼殺しに問題はないだろうが念のためだ。二つ目は、誠に遺憾だが、校長からの指名だからだ。」

「教えて頂いてありがとうございます。……スネイプ先生も大変なん

ですね。」

やめろ、そんな同情を向けるな。

「さて、今日はもう時間が無いため宿題を出すことにする。基本的な攻撃呪文である武装解除についてレポートに纏めてきたまえ。個人授業は毎週この時間に行うことにする。」

「分かりました。よろしく願います。」

クリスマス

ルクスリア視点

クリスマスが近づき、生徒達は帰省することを楽しみにしている。私は、あの孤児院には戻りたくないなのでホグワーツに残る予定だ。ハリーも私と似たような理由で残るみたい。

ハーマイオニーは帰省しちゃうらしい。家族がいるなら一緒に過ごした方がいいもんね。

ウィーズリー家は今年は都合が悪いらしく、皆ホグワーツに残るみたい。彼らのおかげで楽しいクリスマスになりそう。

「可哀想に。家に帰ってくるなど言われてホグワーツに居残る子がいるなんてね。」

声のする方を見ると、マルフォイが意地悪げな顔で此方に向かってきていた。皆凄くマルフォイを敵視してるけど、私はそんなに気にならないけどな。なんか構って欲しい子どもっぽいし。

「マルフォイ、違うよ。私には帰る家がないから帰らないだけだよ。」私の話を聞いたマルフォイはバツの悪そうな顔になった。なんだかんだ他人の痛みがわかるんだよね、マルフォイって。皆気がついてないみたいだけど。

「そうかい、じゃあ精々お友達のポッターとウィーズリー達と仲良くすることだね。」

「そうするつもりだよ。きっと、私の人生で最高のクリスマスになると思ってるよ。」

マルフォイは面白くなさそうにスリザリンの生徒達の方に帰っていった。

「ルクスリアって、マルフォイのあしらい方が上手よね。」

ハーマイオニーがそんなことを言ってきた。ハリーとロンも同じことを思っていたようで、うんうんと頷いている。話を聞いていた他のグリフィンボール生も、思っていたみたい。

「そうなの？何も気にしてないんだけどなあ。……強いて言えばマル

フオイの事を皆みたいに敵視してないからかな？」

「そう言うところだよ。」

そうハリー達に若干呆れられた。なんended。

スネイプ先生との個人授業が始まってから一ヶ月が経った。スネイプ先生は、とても理論的に魔法を教えてくれるので、凄く分かりやすい。そのおかげか、他の授業でも理論的に考えるようになり、授業がより楽しくなってきた。

今までに教わったのは攻撃呪文の、武装解除、失神呪文、妨害呪文、粉々呪文だ。毎週呪文についてレポートを書いていき、そしてスネイプ先生の監督のもと、実際に呪文を唱えるという内容だ。

今のところ全ての呪文で、スネイプ先生から合格を貰っている。武装解除が最初の攻撃呪文と言うことで、要領が上手くつかめず時間がかかったが、そのおかげでコツをつかんだので、その他の呪文はすぐに使えるようになった。

「これらを覚えていけば、攻撃手段には困らないだろう。」とスネイプ先生が仰ったので、今回からは守りの呪文を教わる。

「さて、吸魂鬼についてのレポートは読ませてもらった。これらの事を君は理解したかね？」

「ひとつだけ質問があります。吸魂鬼はどうやって生まれるのですか

？」

「吸魂鬼の最初の個体がどのように生まれたのかは分かっておらん。だが、その後の個体については分かっている。吸魂鬼は人から幸福感を吸うことで生きているが、最も効率的な吸い方がキスだ。吸魂鬼のキスを受けた者は、魂の脱け殻となり、ただ生命活動が行われるだけのモノとなる。そして、しばらくするとそのモノが魂を求め始め、吸魂鬼となるのだ。」

「……じゃあ、元々は人間なんですね。」

「左様。奴等を完全に消滅させる魔法は現在の所存在しない。奴等を退ける魔法のみ存在する。それが守護霊の呪文だ。この呪文は非常に高度なもので、修得までに年単位が必要な場合すらある。それは、幸福な記憶を想起し、それを維持するのが困難という理由からだ。しかし、君はイメージをする力が強い。月単位で修得出来るだろう。では、実際に手本を見せる。」

スネイプ先生は杖を取りだした。

『エクスペクト・パトローナムー守護霊よきたれー』

スネイプ先生が呪文を唱えると、杖の先から何か銀色の煙の様なモノが吹き出した。そしてそれは徐々に何かの形に纏まり始めた。牝鹿だ。

「このように守護霊は、何等かの動物の形になる。これは、意識する必要はない。勝手に君に相応しい動物に変化する。さあ、やってみたまえ。」

まずは、幸福な記憶が大事なんだよね。私の幸福な記憶って何だろう？

きつと、ホグワーツに来てからの記憶は幸福だよ。そのなかでも特に幸福な時間は何だろう。

初めてちゃんと魔法を使えた時かな？マツチ棒を針に変化させられた時。自分にこんな力があるなんて感動したっけなあ。

よし、この記憶でやってみよう。

『エクスペクト・パトローナムー守護霊よきたれー』

杖先からは、何も出なかった。杖も「そんな記憶じゃ全然足りねえよ。もつと思いいせ。」と言ってるように感じる。やっぱりこの杖には意思があるよね。

言われなくても考えるよ。さて、これよりも幸福な記憶って何かあるかな。

あの時かな。ハーマイオニーとお話して、トロールが急にきて、でも、ハーマイオニーを守りきることができたあの時。なんとも言えない充足感があった。ネビルの時にも思ってたっけ。

誰かを救えた。誰かを守れたって思ったら、凄く満たされたんだよね。

その時の事を思い出す。

身体が温かくなるのを感じる。

筋肉が緩むのを感じる。

呼吸が落ち着くのを感じる。

頭がスツキリするのを感じる。

心が満たされるのを感じる。

凄く、凄く心地良い。

『エクスペクト・パトローナムー守護霊よきたれー!!』

瞬間、杖から勢い良く銀色の煙が吹き出した。煙が吹き出しきると急速に集まり始め、徐々にその姿を現し始めた。

狼だ。

凜とした佇まいの中に、何処か安心感を感じる。

触ってみると、記憶を思い出していた時のような心地いい感覚になった。

「狼とは予想外だった。名前からして、兎か山羊もしくは蠍かと思っていたのだが。」

スネイプ先生が皮肉げに言ってきた。

「流石に酷いですよ、スネイプ先生。名前がルクスリアなだけで、私自身がルクスリア（性欲の悪魔）の化身ってわけではないんですけど。」
「そんなことは分かっている。だがな……君は世の魔法使いの大半を敵に回したも同然なのだ。自分で言うのもなんだが、我輩は優秀な魔法使いの部類だ。その我輩でさえ、守護霊の呪文を成功するのに半年かかったのだ!! それにも関わらず、君はたった数時間で成功した。皮肉の一つでも言わねば気がすまん……。」

スネイプ先生は顔を手で覆って椅子に座ってしまった。そんなこと言われても、出来てしまったものはしょうがないじゃない。たった数時間って言われても。

……………ん？数時間？

「先生、今日の個人授業を始めてからどれだけ経ちましたか？」

「三時間だ。一度呪文を唱えて失敗した後、君は二時間以上記憶を思いだし、その感覚を体験していた。そして、再度唱え成功させたのだ。まさか、記憶を思い出すだけでなく、それを思い出した時の心身の感覚を体験するとはな。その様な方法など考えつかなかった。この方法が他の魔法使いにも有効ならば本が一冊書けるぞ。」

「そんなに時間が経っていたなんて、先生の時間を奪ってしまってますいませんでした。おかげで成功させられました。」

普段なら一時間の所を三時間以上見て貰っていたなんて、申し訳なかったな。

「新しい可能性を見せて貰った。それで、許そう。良く成功させた。しかし、実際に使用する時は数時間もイメージする暇はない。次回からは瞬時に使えるように訓練する。今日はもう遅い。寮に帰りたいな。」

今日の授業は終了となった。

あ、晩ご飯食べ損ねた。

朝の光で目が覚めた。ベッドの脇を見ると、プレゼントが置かれていた。今日はクリスマスだ。

早速プレゼントの開封に取り掛かろうとしたが、その量を見て手が止まった。

やけに多い。

交友関係は決して悪い方ではないし、友達も多いと思っているけど、クリスマスのプレゼントを贈り合うような関係の人はそんなにいないはず。恐る恐る見てみると、知らない名前が多い。特に男子からが多く、メッセージカードには口説き文句が書かれているものもある。

呪いはかかっているはず。もしかかっていたら、もつと直接的な行動に出てくるはずだからね。そうすると、純粹に私に好意を寄せにくれている人達がいるのか。

……誰かに相談しよう。

正直初めての事で良くわからない。

とりあえず、プレゼントを仕分けよう。

ハーマイオニーからは新しい羽ペン、ハリーからは杖の手入れセット、ウィーズリー兄弟からは手編みの厚手のセーターが贈られてきた。その他には、ラベンダーとパーバティ、セドリック等からも来ていた。

どれも本当にうれしい。

さて、問題のそんなに親しくない人からの物は大半がお菓子だった。しかもどれも量が多い。私は良く食べる方だがこんなにお菓子

ばかりは食べきれない。……いや、食べきれるか。

試しに一つ開けてみる。レイブンクローの上級生からの物だ。中はクッキーでクリスマス仕様なのかとてもカラフルだ。一つ口に運んでみる。

パリン

ガラスが割れる様な音がした。慌てて口から出してもガラスが混入しているわけではなかった。気のせいかな？

もう一枚食べてみる。

パリン

また鳴った。

味は普通のクッキーなのに、ガラスの割れる様な音がしてたら流石の私も食べる気が失せるよ……。

その後、他のプレゼントも食べてみたけど、いくつか同じように音のなるお菓子があった。

魔法使いの最近の流行りなのかな？正直魔法使いのお菓子って食欲を抑えるものが多いよね。蛙チョコとか百味ビーンズとか。ダイエツトが必要な人が多いのかな？

プレゼントの開封はここまでにして、談話室に行こう。せっかくのクリスマスをひとりぼっちで過ごすのは勿体無いからね。

昼間はウィーズリー兄弟、ハリーと雪合戦をし、クリスマスの豪華な食事を堪能して談話室に戻ると、ハリーが私とロンに耳打ちしてきた。

「この後、二人に見せたいものがあるからついてきて!!」

私とロンは顔を見合わせる。いくらクリスマスと言えど夜間寮を抜け出すのは禁止されている。見つかってしまったら、減点されるし良くないだろう。

「ハリー、それは今晚じゃなきや駄目なの?」

「今日見せたいんだ!! 見つからない様にそこまで行く方法もあるからさ!!」

そう言うと、ハリーは何かを取り出したが全く見えない。

ハリーはクリスマスプレゼントに透明マントを貰っていた。それだろう。

「しようがないなあ。ついていくよ。でも、途中で誰かに見つかりそうになったら引き返すんだよ。」

「分かったよ。」

透明マントを三人でかぶり移動してある部屋にたどり着いた。そこには大きな鏡が置いてあった。

「これだよ!! ぼくの横に来て鏡を見て!!」

私とロンは言われた通りに移動した。

鏡を見る。

目を疑った。

私がいる。私の回りには多くの人がいる。皆笑っている。私はその中心で眼帯をはずし、前髪も分け、顔を隠さずに笑っていた。回りの人が呪いにかかっている様子はない。その中には孤児院の時に関わった人達もいた。

「ぼくのパパとママだよ。」

「凄いや、ぼく首席でしかもクイディッチのキャプテンだ。ハリー、こ

れってその人の将来をうつすのかな?」

「違う。これは将来をうつすんじゃない。これは私達の願望をうつして
るんだよ。」

そうだ。これは将来なんかじゃない。己の願望だ。ハリーは両親
との生活、ロンは成功、私は魔眼に縛られないことを望んでいる。

理解してもこの鏡は魅力的だ。まるで、吸い込まれるかのように見
てしまう。

危険だ。

「二人ともこの鏡は危険だよ。望みを見せるだけなんてあり得ない
よ。最悪鏡に魂を吸われそうだよ。」

「その通りじゃ。君は聡明じゃな。ルクスリア。」

振り向くとダンブルドアが立っていた。いったいいつの間。

「その鏡はみぞの鏡といってな。ルクスリアの言った通りのモノ
じゃ。今までに何人もその鏡の虜となり、命を落としておる。生徒の
少ないクリスマス期間のみ此所に置いておったのじゃが、わしの不注
意じゃったな。すまん。この鏡は明日、他の場所へ移動させる。間
違っても探そうとしてはいかんぞ。」

ダンブルドアは普段みるお茶目さ等微塵も感じさせないほど、真面
目に話した。

「安心しなさい。夜間に出歩いていたことは咎めんよ。全てはわしの
責任じゃ。さあ、寮に帰って休みなさい。」

ダンブルドアは最後に慈愛溢れる顔をして私達を送り出してくれ
た。

「まさか、あんなモノだったなんて。ごめんね。危険な目に合わせ
ちやつて。」

寮に帰るなりハリーは謝ってきた。知らなかったとは言え、私達を
危険に晒したことを気にしているようだ。

「知らなかったんだからしょうがないよ。おかげで自分の願望を確認
できたから、良いところもあつたし。」

「そうだよ、ハリー。僕達気にしてないよ。……それにしてもホグワーツって危ない場所が多すぎないか？魂を吸う鏡に、危険な森、それに三頭犬のいる部屋なんてさ!!」

「三頭犬？そんなのいるの？」

ケロベロスのようなモノだろうか？そんなのが学校にいたら、大問題な気がするけど。

「そっか、ルクスリアには話してなかったっけ。以前僕とロンとハーマイオニーで寮を抜け出したんだけど、フィルチから逃げてる途中に迷い混んじやった部屋にいたんだ。ほら、入学式の時にダンブルドアが入ったら痛い死に方をするって言ってたところだよ。」

「そんなことがあったんだ。……なんで教えてくれなかったの？」

「もし広まったら僕達が罰則になっちやうからさ、それを防ぐためだよ。」

仲間はずれにされてたみたいで不満だけど、とりあえず許してあげよう。

「ハリー、ルクスリアにもやつぱり協力してもらおうよ。ルクスリアだけ仲間はずれみたいになるのは良くないよ。」

「そうだね。ルクスリアなら大丈夫だよね。」

なんだか勝手に二人が決心を固め始めたぞ。まだ私に秘密があったのか？

「ルクスリア、僕達は三頭犬のいる部屋の奥に何か隠されていて、それをスネイプが狙ってると思ってるんだ。……ハーマイオニーはクイレルを疑ってるけどね。それで、僕達で色々調べてるんだけど、君も協力してくれないか？」

そんなことをやっていたのか。なんでスネイプ先生を疑ってるの？そんなことする人じゃないと思うんだけどな。むしろ、クイレル先生の方が怪しい。

「良いよ。協力する。だけど、私はハーマイオニーと一緒に怪しいのはクイレル先生だと思うよ。クイディッチの試合でハリーに呪いをかけていたし。」

「ハーマイオニーも同じ事を言ってたけど、僕にはそう思えないや。」

まあ、それはいったん置いておこう。それで、とりあえず今はニコラス・フラメルについて調べてるんだけど、心当たりない？」

ニコラスⅡフラメルってあのニコラスⅡフラメルかな？

「ニコラスⅡフラメルってたしか錬金術師じゃなかったっけ？賢者の石で有名な。」

ハリーとロンは顔を見合せた。

「それだ!!」

やっぱり仲いいねこの二人。

禁じられた森

「あの部屋に隠されているのは、賢者の石でほぼ確定ね。ルクスリアがニコラスⅡフラメルを知っていて助かったわ。」

「最初に食べた蛙チョコのおまけに書いてあったから覚えてただけだよ。」

休暇が終わり戻ってきたハーマイオニーも加わって、四人で賢者の石について調べてる。

「でも、何でホグワーツに隠してるんだろう？ グリンゴッツに以前はあったんでしょ？ たしかグリンゴッツって凄く安全な場所だよね？ それよりもホグワーツは更に安全ってこと？」

ホグワーツって銀行よりもセキュリティが凄いの？

「そりゃそうだよ。なんせ此所にはダンブルドアがいるんだ!! 彼がいるところが最も安全だよ。」

そうロンは熱弁している。ダンブルドアってそんなに凄いのか。「なら、私達が何かしなくても大丈夫なんじゃないの？」

とてもじゃないけど私達一年生四人じゃ束になってもダンブルドアには及ばないしね。

「ダンブルドアはスネイプを疑ってないんだよ。それを利用して上手くダンブルドアを出し抜く算段をつけてるかもしれないだろ？ だから、僕達を守るんだ!!」

「スネイプ先生じゃないと思うけどなあ。……ごめんごめん。この話はしないんだったね。」

怪しいのはスネイプ先生かクイレル先生かで、何度も衝突しているが、どちらも譲らず平行線のままだ。これ以上やっても埒があかないので、この話はしないことにしてる。

今だにクイレル先生がなぜハリーに呪いをかけていたのかは分かってない。これが分かれば、謎が解けそうなんだけど。

「そんなことよりも、いよいよ今夜だね。ノーバートをチャージャーに預けるの。ハグリッドは今頃ノーバートと最後の時を過ごしてるだ

ろうね。」

ハグリッド……。いい人なんだけど、ちよつと……。いやかなり抜けてるんだよな。

この前ハグリッドの家を訪ねたときに、ドラゴンの卵を持っていたんだよね。ドラゴンの卵の所持は違法なのに!!

しかも、その卵を。パブにいた顔を隠した男と賭けをして貰ったなんて……。しかもその時に三頭犬の宥め方をうっかり教えるなんて、あまりにも迂闊すぎるよ。

その卵がついに孵化したんだけど、やっぱり隠しながら飼い続けるのは無理だつてなって、ロンのお兄さんがドラゴン関係の仕事をするから引き取ってもらおうことになったんだよなあ。

「今回はバレたら大事だ。慎重に行かなきゃね。」

なんだか、今回はダメな気がするんだよね。

結論から言うとやっぱりバレた。

マルフォイが告げ口したからだ。

そのせいで、マクゴナガル先生に四人合わせて200点を減点された。マルフォイも含めると220点か。

ノーバートは、ロンのお兄さんのチャージャーに預けた後だったので無事だ。

その代わりに私達5人には罰則が言い渡された。そして、今夜その罰則があるらしい。

その罰則を行う場所に向かうため、私達はフィルチに連れられて城を出た。そこにはハグリッドが待っていた。

「おい、デカブツ、罰則のある生徒を連れてきた。間違っても緩くしようなぞ思うなよ。まあ、お前がこいつらが罰則を受ける原因らしいかな?」

「分かっている。皆すまねえ。全部俺のせいだ。」

ハグリッドは本当に申し訳なさそうに頭を下げてきた。……正直ハグリッドに巻き込まれた形だけど、彼のこういう態度のせいか憎みきれない。

「今夜は罰則として禁じられた森に入る。」

「あの森に入るの?!」

マルフォイが怯えた声で聞き返した。

正直私も恐い。あの森からは、謎の呻き声が聞こえてくるとか、危険な魔法生物が住んでるとかそんな噂が絶えない。

「ああ、そうだ。今年度になってからあの森でユニコーンの死体がいくつも見つかっている。ユニコーンってのはそんなに柔な生き物じゃねえ。そんなユニコーンを殺せる危険な何かがいる可能性が高い。」

ユニコーン、伝説の生き物もいるんだね。

「そして、今朝ユニコーンの血の後が見つかった。出血の量から、まだ生きている可能性が高い。その可哀想な奴を見つけたのが今回の罰則だ。」

今回の罰則はかなり危険そうだ。気を抜かないようにしないと。杖は常に持つておこう。

「よし、チームを分ける。俺とロンとハーマイオニー。ハリーとルクスリア、それにマルフォイだ。」

ハグリッドと違うチームになるのは正直恐い。守ってくれる人がいるのといないのでは、こんなにも安心感が違ってくるのか。

ハリーとマルフォイも同じ気持ちらしく、不安そうな顔をしてい

る。

私達の方にファング（ハグリッドの犬）がついてきてくれる事になったが、ファングは臆病らしい。

「よし、ユニコーンの死体を見つけたら、杖で合図をするんだぞ。危険な目にあいそうな時だ。すぐに駆け付ける。」

ユニコーンの搜索が始まった。

「まったく、生徒にこんなことをさせるなんて。こんな使用人の仕事だろ。父上がこのことを知ったらなんと言うか!!」

マルフォイは不満タラタラだ。私達が規則違反をしなければ、マルフォイは巻き込まれることは無かったもんね。自分の行動が他人にも迷惑をかけるって正にこういうことだよね。

「ごめんね、マルフォイ。私達が規則違反しなければ貴方も巻き込まれなかったのに。」

そう言うと、マルフォイは「またか……」と言いたげな顔になった。私何か変なこと言ったかな？

「いいか、確かに君達が校則違反をしなければ、僕は今こんな場所になかっただろう。けどな僕は君らを貶めようとしていたんだぞ？その僕に謝るのか？こう言うのは癪だけど、今回の件で僕に敵意を向けてくるポッターやウィーズリーの方がまともだ。君はかなり変

わってるぞ。」

そんなこと言われてもな。私はそう思ってしまったんだからしょうがないじゃない。

「マルフォイ。ルクスリアはいつもこうだよ。滅多に人を悪く思わないんだよ。しかも、かなり頑固だ。ルクスリアがそう思ってたんなら、もうその考えは変わらないよ。」

ハリーが言うとうとマルフォイは納得した顔になり、二人して私を変なもの様に見てきた。

不満だ。

「無駄話はここまでね。ここからは静かに行こう。森の生き物を変に刺激したらどうなるか分からないからね。」

しばらく進むと辺りに妙な匂いが漂ってきた。

……血の匂いだ。

二人も気がついたようで、顔が強張っている。ファングなんて震え上がっている。この先にユニコーン以外の何かがいるのかもしれない。

慎重に近づいていくと、そこにはいた。

全身を隠すように、大きなローブを目深く被ったモノが。

ユニコーンの傷口に口をつけ一心不乱に血を飲んでる。飲んでる姿からは狂気が感じられる。

パキッ

枝が折れる音が響いた。ファングが怯えて踏んでしまったようだ。ローブのモノは此方に気づき、立ち上がった。

その瞬間ファングは逃げ出し、マルフォイもそれに続いていった。私とハリーはローブのモノと対峙する。

ローブのモノは此方に腕をつきだしてきた。まさか、杖を持ってるの?!

『プロテゴ!!! 守れー』

ローブのモノから赤い光線がとんできたため防御する。ハリーを背に庇う。

私が戦わなければ!!
ハリーを守らなければ!!

ローブのモノは次々と呪文を放ってくる。
それを私は防ぐ。

呪文の弾幕に一瞬の隙ができた。

今だ!!

『ステューピファイ!!ー麻痺せよー』

失神呪文を唱える。相手は驚いたように回避した。盾の呪文を唱えた時には無かった動揺がみられる。

もしかして、私のことを知っている？

ローブのモノは分が悪いと考えたのか、素早く森の奥へと消えていった。

「ハリー、大丈夫? 怪我はない?」

「大丈夫だよ、ありがとうルクスリア。君のおかげだよ。まさか、あんなにルクスリアが強いとは思わなかったよ。」

良かった。

無事みたい。

守りきれた。

幸福感に全身が包まれる。

ああ、今なら守護霊の呪文をいくらでも唱えられそう……。

「ルクスリアこそ怪我はない?」

「全部防いだから平気。流石に疲れたけどね。とりあえず、早めにハグリッド達と合流しよう。また襲われたら大変だからね。ハリーに合図をお願いしてもいい?」

あらかじめ決めておいた合図をハリーが打ち上げる。私はハグリッド達が到着するまで警戒し続けた。

ハグリッド達と合流した。残念ながらユニコーンは死んでいた。今はユニコーンを埋葬している。

皆ユニコーンの哀れな姿に、黙々と作業をしている。あのマルフォイ（逃げた後、ファングと共に合流したらしい）でさえ、敬意を表していた。

ユニコーンの血には、死に絶えそうな状態であつても命を生き永らえさせる力があるらしい。

しかし、その代償として「生きながらの死」と言われる程の呪いを受けるそうだ。

あのローブのモノはそんな呪いを受けてでも、死にたくなかったのか。

死に例えられる程の苦痛を受けてなお、肉体の生に執着しているのか。

なんだか、可哀想だ。

ローブのモノの正体が気になる。

おそらく、人間の魔法使いだろう。杖を使える生物は人間だけだし、使っていた呪文も失神呪文だった。

性別は分からない。変身術を使えば性別も変えられる。体格も同じだ。

後、何か材料はあるだろうか。

私の盾の呪文には驚かず、失神呪文に驚いたことか。

私が盾の呪文を使える事を知っているのは、ハリー、ロン、ハーマ

イオニーと教師陣だけだ。つまり、ホグワーツにいる人達の誰かと推測できる。

ハリー達は一緒にいたので除外だ。

そうなると教師陣が残るけど、いったい誰だ。

スネイプ先生は違う。スネイプ先生自身が教えてくれたのだ。あの反応はおかしい。

ダンブルドアも違うだろう。ロンの言う通りなら、私相手に逃げたりはしないだろうし、スネイプ先生が報告している可能性が高い。

他の教師陣については分からない。

何か、あと一つ何かあれば答えに辿り着けそうなのに。

「よし、こんなんでいいだろ。皆よくやった。ありがとう。こいつも安らかに眠れるだろう。」

埋葬が終わり、黙祷を捧げる。

「ハグリッド、今までにどれだけのユニコーンがこんな目に合ってきたの？」

ハーマイオニーが「許せない」といった顔で質問した。

「俺が森番になってからはこんなことは無かった。だが、今年度になってから見つかり始めた。だいたい週に1頭か2頭のペースだ。既に30頭は越えている。」

そんなに襲われているのか。今年度になってから。

ん？今年度になってから？

今年度になってからということとは、誰かが今年度になってから新たにホグワーツに来たということ。

今年度になってから新たに来たのは、私達新生だ。

しかし、新生の可能性はないはず。

考えられるのは……。

「ハグリッド、今年になってからホグワーツの教員になった人はいる？」

「突然どうした？……まあ、いいか。新任の先生はおらんよ。皆ホグワーツに以前からいた先生方だ。」

なんだって。いないの？

予想が外れてしまったのか……。

「新任の先生はおらんがクイレル先生が一年間の休暇が終わって、復職したな。もとはマグル学だったんだが、新しく闇の魔術の防衛術に就かれたな。変なターバンを巻いていて、性格も変わってたから驚いたもんだ。」

そういうことか!!

「ありがとうハグリッド。助かったよ。」

やっぱり私の考えは正解だった。

犯人は、クイレル先生だ。

試験と試練

禁じられた森での罰則からしばらく経った。ローブのモノがクイレル先生じゃないかと三人に言ったら、一応納得してくれた。

ハリーと、ロンは渋々って感じだったけどね。

クイレル先生自体も、授業等では相変わらず挙動不審だ。

……元々挙動不審すぎて、変化があるのかないのかすら分からないってのもあるけど。

しかし、あくまで推測の段階で、証拠は掴めてないから何もしていない。

何より、私達は今危機にたたされているのだ。

そう、試験だ!!

学生にとっては、避けることのできない一大事。普段から真面目にやっている者、遊び呆けている者、誰にでも平等に訪れ心を揺さぶる。私達にも例外なく訪れた。毎日空き時間があれば図書館に通い、知識を頭に一つでも多く詰め込み、またある時は今までに習った呪文の復習に明け暮れている。

ハーマイオニーは試験のストレスからか、若干ヒステリックになり突然泣き始めるし、ロンはどこか一点を見つめてブツブツ呟き始めるし、ハリーは記憶力が上がるという怪しげな薬を双子から買おうとしていた。

変な行動をしているのは、別に三人だけでなく多くの生徒が色々と変な行動をしている。

変化がないのは双子くらいか。以外と頭いいんだよね。だけど、怪しい物売るのはどうかしてる。

私も皆に比べればまだまだだけど、少しはストレスが溜まっている。

まあ、以前は毎日がストレスだったからこの程度はどうってことな

いんだけど。

それでも貯めるのは良くないので、小まめに発散している。今も絶賛発散中だ。

最近は同じように発散する仲間が二人できて、非常に楽しい。

「二人とも良く食べるね!!」

「ん。」

二人は私に目を向けて唸ると直ぐに食事に戻った。二人はあんまり喋らない。そんな暇があるなら食べる、と言わんばかりに料理を掻き込んでいく。

イギリスの料理は不味いと良く言われるらしいけど、ホグワーツの料理は本当に美味しい。しかも、イギリス料理だけでなく他の国の料理も日替わりで作ってくれる。私達にとっては天国だ。食べる手が止まらない。

「前から言おうと思ってたんだが、なんでグリフィンドル生の君がスリザリンのテーブルに来るんだい?」

声のする方に目を向けるとマルフォイが不快そうな顔で此方を見ていた。隣にはパンジー・パーキソンもいて、私を睨んでいる。

そう、私は今スリザリンのテーブルでクラブとゴイルと一緒にご飯を食べている。

「いつも一緒にポッター達と食べれば良いじゃないか。何を好んでスリザリンのテーブルで、しかもまともに話さないクラブとゴイルと食事をするんだ?」

「だって、ハリー達は勉強のためにサツと食べるからさ、それだと流石に足りないんだよね。でも、一人で食べ続けるのも寂しいからさ、一緒に食べる人を探してたら、たくさん食べてる人を見つけて、それがたまたまスリザリンのクラブとゴイルだったの。ね、二人とも?」

「ん。」

クラブとゴイルは、やっぱり唸るだけで直ぐに食事に戻った。「君の事情は分かったけど、もう三人で食べるのはやめてくれ。」

マルフォイは心底嫌そうに言ってきた。回りのスリザリン生も無言で訴えてくる。

「私がグリフィンボール生だから？」

「それもあるけど、毎回毎回三人で大量に食べるのを見させられる此方の気分が悪くなるんだよ!!特に君だ!!君の食べる姿に魅せられている奴等もいるが、なんでその体にあれだけの食べ物が入るんだ!!クラブとゴイルよりも食べて、なお平気ってどうなっている!!」

「食べれるんだからしょうがないじゃん。……でも、気分が悪くなるのは良くないか。んー、じゃあ不満だけど止めるよ。食事の時間が不快って嫌だもんね。」

せつかく仲間を見つけたけど仕方ないか。

別にたくさん食べなくても平気だし。

「二人ともありがとね、楽しかったよ。マルフォイもごめんね。」

スリザリンのテーブルを去ろうとすると、目の前に人影が現れた。パンジーだ。

さつきまでマルフォイの隣にいたのに、いつの間にか私の前に立ち塞がっていた。

「あんたさ、本当はドラコに色目使うために来てたんじゃないでしょうね!!あんなにバクバク食べるようなデブ女が調子がつてんじやないわよ!!着痩せするみたいだけど、そのローブの下は贅肉だらけなんですよ?」

なんだか、すごい剣幕で話しかけられた。

私、そんな風に見られてるのかな?

「色目なんか使えないよ。顔隠してるし。後、何故かお肉が身体につかないんだよね。私も不思議なんだけどさ。」

「揚げ足とるんじゃないわよ!!それに、あれだけ食べて太らないわけがないじゃない!!」

「本当だよ。触ってみる?」

「……ずいぶん余裕なのね。」

パンジーは予想外だったのか一瞬固まった。それでも意地悪い顔でお腹を触ってきた。

「嘘……なんであんなに食べてるのに、そんなに細いのよ。」

今度こそ本当に固まってしまった。まあ、そうなるよね。私も信じ

られないし。

「納得してくれた？これ以上いると、迷惑そうだから私行くね。」

また、勉強に戻らなきゃ。

試験は無事終了した。思ったよりできた、特に実技はほぼ完璧だったんじゃないかな？

ハリー達もそれぞれ自分の持つてるモノは全て発揮できたようで、試験の解放感に酔いしれていた。

だけど、私だけもう一つあるんだよね。

スネイプ先生との個人授業だ。

試験の内容は、守護霊の呪文を実践レベルの速さで唱えること、そして、守護霊に伝言を託しスネイプ先生に伝えることだ。

「スネイプ先生、失礼します。」

「入りたまえ。」

扉を開けるとスネイプ先生は待っていた。

「我輩は、この後に試験の採点がある。手短に済ませよう、直ぐに始めたまえ。」

スネイプ先生の言葉を合図に杖を素早く構える。

一瞬で身体が幸福感に包まれる。

『エクスペクト・パトローナムー守護霊よ来たれー』

杖先から銀色の煙が吹き出し狼の形になる。

私は守護霊に伝言を託す。

託し終えると、守護霊をスネイプ先生の方へ飛ばした。

守護霊はスネイプ先生の耳元に近づき伝言を伝えた。

「合格だ。」

良かった。無事伝えられたみたい。

「これで、個人授業の試験を終わりにしよう。この数カ月で君には、呪文だけでなくある程度の知識も授けた。来年度からは、自分で危険なモノは判別し安全なモノを選ぶことができるだろう。よって、個人授業は今回で終了だ。」

え、もう終わりなの？

まだまだ教えて欲しかったのに。

「スネイプ先生、私としてはできれば来年度も続けてほしいのですが？」

「我輩はこう見えて忙しいのだよ。それに、この授業は校長からの依頼があつたから行つたのだ。」

スネイプ先生は皮肉たつぷりに言ってきた。今までに色々言われすぎて全然気にならないですよ、スネイプ先生。

「つまり、校長先生からの依頼が再びあれば引き受けざるを得ないということですね？」

「……悪知恵は相変わらず働くようだな。」

スネイプ先生は苦笑しく言った。

「じゃあ今からダンブルドア校長先生の所に行つてきます。何処にいらつしやるか御存知ですか？」

「残念ながら校長は今日はおらん。明日以降にしたまえ。」

えっダンブルドア先生いないの？

「ダンブルドア先生って、良く外出されるんですか？」

「全く出掛けないわけではないが、一日ホグワーツを離れるのは稀だ。もっとも、教員達に知らせているモノだけの話だな。」

スネイプ先生は疲れた顔になった。

苦労してるんですね。

でも、タイミングが悪いな。直ぐにでも話したかったのに、たまたまいないなんて。

教員は皆知ってるなら、生徒にも教えてくれれば良いのにな。

あれ？

教員は皆知ってる。

ダンブルドア先生がいないのを。

ダンブルドア先生はとても強い。

そのダンブルドア先生がいない。

守りは弱まっている。

つまり、好機。

もしかして、今晚誰かが賢者の石を狙う可能性が高い!!

こうしちゃられない。急いでハリー達に伝えよう。

「それでは、後日ダンブルドア先生を説得してきますね。ありがとうございます。ごぞいました。」

そう言って、駆け足で教室を後にした。

ハリー達と合流した私は、ダンブルドア先生がいないことを告げると、私達は今晚賢者の石が狙われる可能性が高いという意見で一致した。

マクゴナガル先生に話してみると驚かれたが、守りは万全で心配することはないと言われてしまった。

なので、夜に寮を抜け出し守りに行くことにし、現在にいたる。ベッドをこっそり抜け出した私とハーマイオニーは、他の二人を起さないように談話室へと向かった。そこには既にハリーとロンもいた。

「よし、皆揃ったね。僕の透明マントで隠れながら行こう。」

私達が透明マントに隠れようとすると、物陰から人が現れ私達は飛び上がった。

ネビルだ。

ネビルはとても真剣な顔をしていた。あんな顔は見たことがない。何か勇気を持って決意した。そんな顔をしている。

「君達また寮を抜け出すつもりだろ？ダメだよ。あれだけ寮の点数を下げたのに、また下げたらどうするつもりなの？」

「そこをどけよネビル!!僕らにはやることがあるんだ。」

ロンが強気に言った。普段のネビルなら、ここで怯えるのだが、今日の彼は違った。

「君達がどうしても行くと言うなら、僕が止める。僕、闘うぞ!!」

まさか、ネビルにこんな一面があったとは。紛れもなくネビルはグリフィンボールに相応しい生徒なんだろうな。

だからこそ、ごめんね。

『ステューピファイ麻痺せよ』

ネビルは呪文によって気を失った。

「ルクスリア、君って時々おっかないよね。」

ロンが何か言っているけど気にしない。

さあ、賢者の石の元へ行こう。

「ここだね。賢者の石がある部屋は。」

「そうだよ。だけど、扉を開けると三頭犬が待ち構えているから慎重にね。」

扉にハリーが手をかけた。

ガチャリ

鍵は開いている。そつと、扉を開けると中から音楽が聞こえてきた。覗いてみると、魔法がかかっているのか、豎琴が勝手に音楽を奏でている。

その豎琴から視線を上げるとそれはいた。本当に頭が3つある。普段は恐ろしいであろう三頭（一頭？）は、音色に酔いしれているのか安らかな顔で寝息をたてている。

起きていないことを確認し、透明マントを脱いだ。

「本当に誰かが来たみたいだね。見て、三頭犬の足下の扉が開いているよ。」

「あの中に入っていったんだわ。追いかけてみましょう!! 三人とも、豎琴を倒さないように慎重にね。」

「まず、私が降りて安全を確認するね。」

扉を覗いてみると、真っ暗で底が見えない。

『ルーモスー光よー』

光を灯すと良く見えた。植物の太い蔦が、生い茂っている。

「えい」

飛び降りてみると、蔦は柔らかくクッションの様に受け止めてくれた。

「三人とも飛び降りて大丈夫だよ。」

私が声をかけると一斉に降りてきた。

三人とも無事着地し、怪我も無さそうだ。

「ここで行き止まりかしら?」

「いや、そんなことは無いでしょ。あの部屋には他に扉なんて無かったです。……それとも魔法で見えなくなっただのかな?」

見たところ、蔦の部屋にも何も見当たらない。でも、あの部屋にはあれ以上無さそうだし、一体どうということなんだろう。

「うわあ、や、やめろ!!」

考えているとロンが突然叫び始めた。どうしたの? つて聞こうとすると、

スルスルツ

蔦が身体に巻き付いてきた。私が抵抗すればするほど蔦は強く巻き付いてくる。

その時、部屋の中が眩い光に照らされた。すると、蔦は私から離れていった。

ドスン

蔦が完全に私を離れたため下に降りれた。見ると三人も無事に降りれたみたいだ。

「皆無事で良かった。あの光は誰がやったの?」

「私よ、ルクスリア。あの蔦は悪魔の罠って言われてるもので、日の光が苦手なの。さ、急ぎましょ。」

扉を潜ると、そこには不思議な光景が広がっていた。

鍵だ。たくさんの鍵。それに翼が生えて宙を舞っている。

「ダメだ、鍵が閉まってる。アロモホラでもダメだった。」

先に次の扉に向かっていったハリーが叫んできた。

鍵が閉まってる、呪文が聞かない。御丁寧に箒が置いてある。ということは、

「あの中に鍵があるんだね、きっと。ハリー、あなたにお願いしてもいい?」

「任せて。この中で最も箒で飛ぶのが上手いのは僕だと思うから。」

ハリーはそう言うのと、颯爽と箒に跨がり鍵を取りに行った。

ハリーは飛んでいる鍵の中で唯一羽が折れている古ぼけた鍵に狙いを定めた。

流星最年少シーカーなだけあって、狙いを定めてから直ぐに捕まえた。

しかし、捕まえた瞬間今まで我関せずと飛び回っていた他の鍵達が一斉にハリーに襲いかかった。

ハリーは急いで私達の方に向かってきた。

「私に任せて『プロテゴ!!』護れー!」

ハリーが通りすぎると同時に盾の呪文を展開し、鍵を全て防いだ。「ルクスリア、鍵が開いたわ。直ぐにこっちにきて!!」

私は盾を維持したまま後退し、扉の中に滑り込んだ。

「これは……」

「巨大なチェス？」

その部屋は巨大なチェス盤だった。向かい側に、白の駒が手前側に黒が並んでいる。

「僕達がチェスの駒となって、ゲームに勝たなくては先に進めないのか。」

ロンが、真剣な顔をしながら話した。

「三人とも今回は僕にやらせてくれ。この中だと僕が一番チェスが強い。大丈夫、君達は僕が絶対に取らせない。」

私達はロンを信じ、ゲームの駒となった。

試合はかなり苦戦を強いられていた。ロンは普通のチェスとは違い、私達4つの駒を捨て駒にできないため、打つ手が限られてくる。しかも、駒を取る際に、相手の駒を粉碎するのだ。ロンの緊張感が伝わってくる。

ゲームは終盤になり、ハリーが取られそうになっている。

「……………この手しかない。ハリー後は頼んだよ。」

「ロン、ダメだ!!」

「君達は賢者の石を守るんだろ？僕が役に立てるのは、今なんだよ。ナイト（ロン）をh3へ!!」

ロンが移動し相手に取られてしまった。ロンは破壊の衝撃で地面に叩き付けられ動かない。

「二人とも動いちゃダメだ!!まだ、ゲームは終わってないんだ。」

そう言うと、ハリーはクイーンの前へ歩いていき、「チェックメイト」と告げた。

ロンは自分を犠牲にして勝利をもぎ取ったのだ。

ゲームが終わると、駒は道を開けた。

私達は、直ぐにロンのもとへ駆け寄った。

ロンは幸いにも、大きな怪我がなく気を失っているだけのようだった。

「先に進もう。ロンのためにもすぐに。」

「この臭い……まさかトロールがいるの？」

扉を開けると嗅いだことのある異臭がしてきた。

「見て、トロールが倒れてるわ!!」

ハーマイオニーが指差した方を見ると、トロールが横たわっていた。不細工ないびきが聞こえるので、まだ生きているようだ。

「トロールの意識が戻る前に急いで行こう。」

次の部屋には中央に丸い机が置いてあるだけだった。机に近づくと、部屋中に炎が吹き出した。出入口の間にも吹き出し、進むことも戻ることもできなくなってしまった。

机の上に目を向けると、いくつかの液体が入った瓶とメモが置いてあった。

「すごい、これはロジックよ!!魔法を知っているだけの人ならここで足止めされてしまうわ!!これを作った人は凄く知的な人間ね!!」

「ハーマイオニー解ける?」

「ちよつと待つてて……」

そう言うのと、ハーマイオニーは紙を見つめたまま話さなくなった。

そして数分後、ハーマイオニーはやりきった顔で声をあげた。

「解けたわ。この薬が先に進むための薬。そして、こっちが戻るための薬よ。」

「流石ハーマイオニーだね。……先に進む薬は僕が飲むよ。二人は戻ってくれ。」

ハリーは自分が行くから戻れと言ってきた。

そんなのはダメだ。

ハリーは、呪文は一年生の中で優秀な方だし、身体能力も高い方だ。だけど……

「ダメだよ、ハリー。貴方より私の方がずっと強いよ。それは、分かるでしょ?」

ハリーを危険な目に合わせるわけにはいかない。今までは、四人でそれぞれの力を出してきたからこそここまで来れた。だけど、一人になった時は自分一人でなんとかしなければならぬ。

「でも……」

「私は大丈夫だよ。任せて。」

そう言うって、私は瓶を取り一気に飲んだ。

脳天から氷水をかけられた様な感覚があった。火に触ってみると全く熱さを感じない。

「行ってくるね!!前の部屋に戻ったらロンを看病してあげてて!!」
さあ、賢者の石を守りに行こう。

賢者の石

ルクスリア視点

炎の中を進み扉を潜ると、そこは広い円形の部屋だった。中央に大きな鏡が置かれており、私が写っている。あれは……みぞの鏡かな？「まさか君が来るとは思わなかったよ。てつきりポッターかと思っていたのだがね。」

鏡の裏から人が出てきた。

「こんばんは。やっぱり貴方だったんですね、クイレル先生。」

そこにいたのはクイレル先生だった。普段の挙動不審な姿は全く無く、私を嘲笑うかの様な顔をしている。

「君はずいぶんと早い段階で、私を疑っていたね。ポッター等はセブルスを疑っていたのに。」

「生憎、スネイプ先生は貴方よりもずっと立派な先生でしたからね。疑う余地なんてありませんでしたから。」

クイレル先生は一瞬面白くなさそうにしたが、直ぐに獰猛な顔になり、私に杖を向けてきた。

「先日の禁じられた森では邪魔をされたが、今回はそういうわけにもいかないのね。悪いが、少々痛い目に合って貰おう。」

赤い光線が飛んできた。

失神呪文だろう。

『プロテゴ―護れー』

盾の呪文を使い隙を待つ。

禁じられた森の時と同じ様に、呪文が次々と飛んでくる。

私はひたすら呪文を撃つ隙を待つ。

少しすると、クイレル先生に隙が見えた。

今だ!!

『ステュ―二度も同じ手を使うとは、やはり呪文を使えるだけの子どもだな。』

「ルクスリアー!!」

私の意識は、目に映る狂った笑みをしているクイレル先生と赤い光線、そして私の名前を叫ぶ男の子の声が聞こえたのを最後に途切れた。

ハリー視点

「ルクスリア……大丈夫かしら？」

ルクスリアが炎の向こうに行ってしまった、取り残された僕にハーマイオニーが話しかけてきた。

僕だって心配だ。いくらルクスリアが一年生の中でも、多くの呪文を使えるからと言って、この先にいる魔法使いに必ず勝てるとは思えない。

でも、

「信じて待つしかないよ、ハーマイオニー。大丈夫、ルクスリアはいつも僕らを守ってくれたじゃないか。きつと、直ぐに帰ってくるよ。」

ここで僕達が弱気になっても仕方がない。僕達はルクスリアを信じて待つんだ。

「ハーマイオニー、先に戻ってロンを看病してくれないかな？僕よりも君の方が、適任だと思う。」

「……分かったわ。ハリーはルクスリアが帰ってきたら、私の代わりに抱き締めてあげて。」

そう言つて、ハーマイオニーは薬を飲み急いで戻っていった。取り残された僕は、ひたすら扉を見つめルクスリアの帰りを待つ。既に10分が経とうとしている。

キーンツ

突然机から音が鳴った。何事かと見てみると、さつきまで空っぽだった瓶が再び薬で満たされていた。

どうやら、ある程度時間が経つと補充される仕組みになっていたようだ。

僕は、迷わず進むための薬を飲みほす。

頭の上から氷水をかけられた様な感覚がした。

僕は、扉に向かって駆け出した。

扉を開けると、そこではまだ戦いが続いていた。

部屋の中央にクイレルがいて扉から左側に移動しながら戦っているルクスリアに攻撃をしていた。

クイレルと一瞬目が合った。

クイレルの顔が、普段からは想像できない程の歪んだ笑顔になった。

クイレルは直ぐに僕から目を離し、ルクスリアの方へ向き直った。すると、クイレルに隙ができた。違う、作つたんだ。

ルクスリアは作られた隙だとは気づかずに、盾の呪文を消した。

『ステュ』二度も同じ手を使うとは、やはり呪文を使えるだけの子どもだな。』

ルクスリアに赤い光線が迫る。

「ルクスリアー!!」

僕は、堪らず叫んだ。

ルクスリアは避けきれずに赤い光線に当たり、壁に打ち付けられた。

「やはり来たか、待っていたぞ、ポッター。」

クイレルが僕の方へ近寄ってきた。

勿論杖を僕に突き付けながら。

チラリとルクスリアを見る。全身から力が抜けてダランと手足が投げ出されている。

頭からは壁に打ち付けられた衝撃からか出血しており、ルクスリアの美しい髪の一部を真紅に染め上げている。

顔にかかっている髪が若干動いているため生きてはいるようだ。

「安心しろ、ただの失神呪文だ。死んではいないだろう。まあ、放っておけば出血多量で死ぬかもしれないがな。」

クイレルは安心しろと言ってきたが、そんなことできるものか。

「こんなことをしたら、ダンブルドアが黙っていないぞ!!」

「だろうな。ダンブルドアは、私が賢者の石を狙っている事を知っていた。あの老人は、それでも私を泳がせ続けていた。全くとんだ甘いやつだ。あの老人は誰にでもやり直すチャンスが与えられるべきだと思っている。その結果が、今夜の外出だ。私はやり遂げた。ようやく賢者の石の隠し場所に辿り着いた。」

クイレルは嘲笑の顔をしながら話していたが、段々と憤怒の形相に変わっていった。

「だが、肝心の石は何処だ!? あるのはみぞの鏡だけ。ああ、鏡の中の私は石を手に行っているのに……。一体何処にあるのだ。」

クイレルは鏡を見つめ項垂れている。

「クイレルよ、その小僧を使え。」

突然何処からか声がした。

「ポッター、此処に来い!!」

クイレルは声に怯える様に叫んできた。

ここで逆らうのは、悪手な気がするので警戒しながら鏡の前に立った。

「何が見える?!!」

僕の両親……ではなかった。鏡には僕とクイレルが写っていた。

鏡の中の僕は、僕に笑顔で左手を振っている。そして、右手には何かを持っていた。

石だ。

真っ赤な血のような色をした石だ。あれが恐らく賢者の石なのだろう。

鏡の中の僕は、悪戯をする子どものような顔でその石をポケットに入れた。

ズン

なんと、僕のポケットに何かが入ってきた。

感触から石だと思う。

「何が見えるんだ!!」

もう一度クイレルがヒステリックに叫んできた。

ここは嘘をつかなければ!!

「ぼ、僕がダンブルドアと握手してる。グリフィンドールがクイドイツで優勝したんだ!!」

「クイレルよ、俺様が直接話す。」

また、突然声がした。

「し、しかし我が君、貴方様はまだ万全ではありません。」

「話すだけならば問題ないだろう。それとも俺様の言うことが聞けないのか?」

そう言われると、クイレルは後ろを向き震える手でターバンを解き始めた。

ターバンが全て解き終わると、そこにはあるはずが無いものがあつた。

顔だ。

クイレルの後頭部にもうひとつ顔がある。

蛇の様な顔だ。

ズキリ

顔を見た途端に、額の傷が強く疼き始めた。

まさか、こいつは。

「ヴォルデモート……。」

見たことはないけど、体中から警鐘が鳴っている。間違いなくこいつはヴォルデモートだ。

「そうだ、俺様がヴォルデモート卿だ。久し振りと言うべきかな、ハリ・ポッター。見ろ、貴様のせいで俺様はゴーストにも劣る存在となり、誰かに寄生しなければ実体化することすらできん。俺様が体を取り戻し、再び魔法界を支配するためには、貴様のポケットに入っている賢者の石が必用なのだ。」

バレている!!

一体どうして!!

「さあクイレルよ、小僧を捕まえッ……」

突然ヴォルデモートは言葉に詰まった。

「な、なんだ貴様は……なんだその眼は!! 何故だ、俺様は貴様が欲しい!! ああ、貴様を俺様のモノにし、ぐちゃぐちゃに成るまで汚しくし、愛し尽くしたい!!」

ヴォルデモートの目に僕は映っておらず、何かに向かって身勝手な欲望をぶちまけている。

クイレルも突然のヴォルデモートの変貌に、戸惑っている。

「わ、我が君、い、いったいどうなさったのですか!!」

「クイレルよ、小僧よりも先ずはあの娘だ!! 俺様はあの娘が欲しい!!

あの娘を捉えよ!!」

「わ、分かりました。」

クイレルが命令に従うためにルクスリアのいる方を見た。

ヒュッ

クイレルは一瞬息を止めた。そして、堰を切ったように喚き始めた。

「ああ、ああ、なんと愛しいのだ。あれだ。あれこそが私に必用なモノだったんだ!! あれは、私のモノだ。いくら我が君であってもあれは譲れない。あれは、私のモノだー!!」

そう叫ぶとクイレルは走り出した。

僕なんか路上の石のようにまるで目に入っていない。

慌てて後ろを振り向く。

この世のモノとは思えないほどの美しさを秘めたモノがいた。

普段は髪によって隠され、眼帯によって更に隠されているモノが全

て頭になっている。

ルクスリアだ。

いや、分かっていた。

この部屋にいたのは僕とクイレルそして、ルクスリアだけだと。彼女の普段隠されている美しい顔に、金色の右眼が爛々と輝いている。

クイレルとヴォルデモートは、誘蛾灯に集まる虫の様に一目散にルクスリアに向かっていく。

「ハリー!!今の内に逃げて!!」

ルクスリアが叫んできた。

君はそんなボロボロになりながら、まだ僕を守ろうとするのか。

それは嬉しい。嬉しいけど……

「嫌だ!!僕だって戦える!!今度は僕が君を守るんだ!!」

そんなの御免だ。

友達が危険な目に合おうとしている。

そんなの見過ごせるわけがない。

たとえ、僕がどうなろうが知ったことか!!

僕を守る。

「ああ、こんな近くにあったのか。ようやく私の心が満たされる。」

ルクスリアの前に辿り着いたクイレルが、恍惚とした表情でルクスリアを見ている。

「貴様、クイレルよ!!その娘は俺様の、僕のモノだ!!貴様が汚していないものではない!!」

ヴォルデモートも喚き散らしている。

「ルクスリアから離れろ!!」

僕はクイレルの腰の辺りにしがみつき、ルクスリアから遠ざけようとする。しがみつくと同時に、疼いていた額の傷が頭が割れるのではないかと思うほど痛み始めた。

構うものか。

「わ、私の体が、や、焼ける、焼けてしまうー!!」

何故かクイレルの体が焼け爛れ始めた。

なんでもいい。

ルクスリアからこいつを離す。

クイレルの体が焼け爛れドンドン崩れていく。

僕も額の傷の痛みのせいで意識が飛びそうになる。

クイレルは腰から下が崩れ落ちているのに、這ってでもルクスリアに近づこうとしている。

「あとすこし、あとすこしなのに……」

そう言っつて、クイレルは崩れ去った。

僕はルクスリアの前まで歩いていく。

「大丈夫？ルクスリア？」

ルクスリアは涙を浮かべた顔で、それでも僕を安心させるためか、笑顔で、

「大丈夫だよハリー。守ってくれてありがとう。」

良かった。

そうだ、ハーマイオニーと約束したんだっけ。

僕は、ルクスリアに近づきソツと抱き締めた。ルクスリアは少し驚いたみたいだったが、優しく抱き締め返してきた。

あの時に嗅いだルクスリアの匂いに包まれ、安心した僕の意識は急速に遠退いていった。

ルクスリア視点

頭が痛い。

全身が怠い。

気持ち悪い。

「ぼ、……………が、……………ぶると……………して……………」

何処からか声が聞こえてくる。

重い瞼を開けると、鏡の前にクイレル先生とハリーがいた。

なんでハリーがここに……………」

「クイレルよ、俺様が直接話す。」

誰のでもない声が聞こえた。クイレル先生がその声に怯えている。

そして、後ろを向きターバンを解き始めた。

「ヴォルデモート……………」

ハリーが呟いた。クイレル先生の後頭部には顔があった。

あれがヴォルデモート卿。以前、魔法界を恐怖に陥れ、ハリーに敗

北し、その後行方が分かっていたいなかったはずだけど、あんな風に生き

ていたなんて。

このままだとハリーが危ない。

だけど、杖は遠くに飛んでいってしまい魔法は使えない。

身体も全身に力が入らず、立ち上がることすら満足にできそうにな

い。

でも、どうにかしないとハリーが……………」

あった。

一つだけ。

杖が無くても動けなくてもハリーを助けられる手段が。

形振り構わず眼帯を取り、髪を分け普段隠し続けてきた素顔を出す。

私を視ろ、ヴォルデモート卿!!

「さあ、クイレルよ。小僧を捕まえッ……」

眼と目があった。

ヴォルデモートは私を凝視している。

ああ、あの目を私は知っている。孤児院にいた頃の人達と同じだ。私を見ておらず、己の欲望のみを押し付けてくるあの目だ。

ヴォルデモート卿がクイレル先生に私を捕まえる様に命令した。

クイレル先生が私の方を向いた。

この人もだ。

この人も同じ目だ。

どちらも私に向かって身勝手な欲望を口にしてている。

もう少しいだ。ハリーからクイレル先生が離れば、その内にハリーが逃げられる。

「あれは、私のモノだー!!」

クイレル先生が遂に私の方へ駆け出してきた。

「ハリー!!今の内に逃げて!!」

私は叫ぶ。

ハリーを守るために。

だけど……

「嫌だ!!僕だって戦える!!今度は僕が君を守るんだ!!」

ハリーは逃げなかった。

それどころかクイレル先生に向かっていき、飛び付いた。

すると、クイレル先生から肉の焼けるような音がし、ドンドン崩れていった。

ハリーはクイレル先生に必死にしがみつき、離そうとしない。顔は苦悶の表情をしていても辛そうだ。

「あとすこし、あとすこしなのに……。」

クイレル先生はそう言って、崩れ去った。

ハリーはフラフラと私の前へ歩いて来てくれた。
ハリーだつて満身創痍な筈なのに、

「大丈夫？・ルクスリア？」

私の心配をしてくれた。何より守ってくれた。とても心があたたかくなつた。

瞳が潤み涙が出てきた。

悲しい涙ではなく、歓喜の涙だ。

「大丈夫だよハリー。守ってくれてありがとう。」

ハリーは私の言葉を聞き、安心した顔をした。

そして、私の前で膝をつき抱き締めてきた。

「？、?!」

突然の抱擁に、ハリーまで魔眼の呪いがかかつてしまったのかと慌てたが、ハリーのとてもし優しい抱擁にそうではないと思えた。

その事実 zu 安心し、私も抱き締め返す。

すると、耳元からする息遣いが非常に穏やかなものになつた。どうやら、眠つてしまつたようだ。

ハリーを楽な格好にしてあげ、私は顔をあげた。

「まだ、そこにいるんでしょう？・ヴォルデモート卿。」

クイレル先生だつたものから、霞の様なモノが浮かび上がった。

良く見ると、先程見たヴォルデモート卿の顔がうつすらと見てとれる。

「いずれ、貴様を俺様のモノにする。待っている。身体を取り戻し、必ず迎えに来る。」

「私は貴方のモノにはならないよ。どうしてもそうしたいなら、先ずお友達から始めようとしたら？・卿を名乗るのに、女性の口説き方すら知らないの？」

「……そうすれば良いのだな？・考えておこう。」

そう言つて、ヴォルデモートは消えた。おそらく、新たな寄生先を探しに行ったのだろう。

完全にヴォルデモート卿がいなくなつたことを確認すると、身体からドツと力が抜けた。

疲れた。

全身が痛い。

頭がフラフラする。

でも、膝に感じるハリーの温かさが心地いい。

そのまま私の意識はまたしても途切れた。

一年目の終わり

ん……。

意識がスウィーツと浮かび上がる感覚を感じた。目を開けると、そこは見知ったグリフィンホール寮の天井ではなかった。

ここ、何処だろう？

首を左右に動かし辺りを見渡したところ、どうやら医務室のようだった。枕元には、お菓子が山積みになっている。なんだかクリスマスみたい。

そんなどうでも良いことを考えていると、私が起きた気配を察したのか、誰かがカーテンを開けて入ってきた。

「目覚めたようじゃの、ルクスリア。具合はどうじゃ？どこか痛むところははないかのう？」

ダンブルドア先生だった。

「大丈夫です。痛いところはどこもありません。」

そうだ、思い出した。私は賢者の石を守るためにクイレル先生と戦って負けたんだった。その後、魔眼を使ってハリーを助けようとして………ハリー？

「先生、ハリーは?! ハリーやロンは無事なんですか?!」

「安心しなさい。二人とも無事じゃ。今はポピーが治療し、良く眠っておる。ああ……心配せずとも防音呪文を使っておるから、わしと話していても彼らを起こすことはないぞ。」

良かった、二人とも無事で。

「あれから、どれだけ経ったんですか？」

「君達を医務室に運んでからまだ3時間程じゃよ。」

「そうですね。マダム・ポンフリーは凄いですね。あの時は全身に力が入らなかつたのに、今は 走り回れそうな位元気になってるなんて。」

もう、全身の痛みはなく健康体だ。

何故か私の言葉を聞いたダンブルドア先生は、顔をしかめ何かを考

え始めた。

数十秒程考えていたダンブルドア先生は、顔を私の方に向け再び話し始めた。

「ポピーは君に何もしておらん。君を見つけた時には既に傷はほぼ治っておった。」

「えっ？どういうことですか？私は治療してないですし、ハリーもできなですよ。」

私は治療関係の呪文はまだ修得していない。

「わしにも全ては分からん。しかし、ある程度の推測なら話すことができるが、どうするかのこと？」

「それでも構いません。聞かせてください。」

「よろしい。じゃが、その前にあの部屋で何があったのか、それを話してくれんかのう？」

「分かりました。お話します。」

あの部屋で起こったこと、私が覚えている限りの事を話した。ダンブルドア先生は私を静かに見つめ、相槌を入れながら静かに聞いていた。

「話してくれてありがとう、ルクスリア。今の君の話で、推測が更に深まった。さて、それではその推測について話すでしょう。いきなり

じやがルクスリア、君はホグワーツの食事が何故あんなに量が多いか分かるかね？」

「食事の量……。そんなこと考えたことなかった。」

「ええと、魔法でいくらでも生み出せるからですか？」

「外れじや。魔法でできない事の一つが食べ物が無から生み出すことなので。あれらの材料は、全て買っておる。正解は青年期の身体の成長と魔力の補充の為じや。魔力と言うものは、ここでは我々人間が魔法を使うための魔力のことじやが、自然に湧いてくるものではなく、魔法使いの身体の中で生成されるのじや。その為には、栄養を消費する。魔力を使いすぎると青年期の身体の成長に必要な分まで使ってしまう場合もあるのじや。それを避けるためにホグワーツでは、あれだけの食事を用意し栄養を補給できるようにしておる。ここまででは良いかな？」

私は頷いた。でも、食事の量のことは分かったけど、それが私の怪我の治癒になんの関係があるんだろう？」

「では、今話したが魔力についても少し話すでしょう。魔力には、どのような作用があるか知つとるかな？」

「魔法を使う力ではないんですか？」

「それだけでは、50点じや。一つ目は、君が答えた魔法を使うためのエネルギーとしての作用じや。人間は杖なしでも魔法を使うことができるが、杖を使った方が効率的で、かつ容易に魔法を使うことができる。そして、もう一つは魔法に対する耐性の作用がある。」

魔法に対する耐性？ いまいち分からない。

「同じ魔法を使つても、人によって効き目が違うのじやよ。君はクイレル先生から失神呪文を受けたが、おそらくほんの十分程で目を覚ました。普通ではありえん早さじや。わしやヴォルデモートでも、失神呪文を受けたらそんな短時間では意識が戻らん。つまり、呪文を受けたものの持つ魔力の量が多いほど効き目が薄れると言うことじや。ルクスリア、君の持つ魔力は凄まじいのじやよ。ただし、どんなに魔力があつても効果の全てを防ぐことはできん。少しであっても、魔法の効果は受けるじやろう。」

なるほど、私が持つ魔力がとても多いから失神呪文を受けてもすぐに目を覚ませたのか。例えると魔力が多いほどフィルターが多くて、そのフィルターを抜ける度に呪文の効力が弱まると考えればいいのかな。でも……

「ダンブルドア先生、私が目を覚ました理由は分かりましたけど、傷が治ったことは説明できないと思うのですが……。」

「話が長くなってしまっただけじゃないんじやが、もう少し待ってくれんかの。……すまんの、続けよう。さて、これらの事を前提にするとルクスリア、君は非常に良く食べるため魔力が多いことは予想できるじやろう。」

私は、それこそ途中でやめなければいくらでも食べられる。その食べ物の内、成長に必要な栄養以外が魔力になっていれば、それこそどこまでも魔力が増えていくんじゃないかな。

「女性にこんなことを聞くのは失礼なんじやが、大事な事なんじや、許しておくれ。ルクスリア、君の食事と君の排泄物の量は釣り合っているののう？」

「?!……いえ、釣り合って……いないです。」

……どうしてだろう。今まで全く気にしたことが無かった。少し考えれば私の食事量と排泄物の量が釣り合っている筈がないとわかるのに。それに対して疑問を持つことが全くなかった。私にとって、それが当然かのように思っていたけど、どう考えても異常だ。だって……

「ダンブルドア先生、私は生まれてから一度も排泄という行為をしたことがありません。」

そう、したことがない。体に入っていったはずの食べ物、飲み物、その全てが何処かに消えている。どうして、今まで気がつかなかったんだらう……。

「答えてくれてありがとう、ルクスリア。ようやく、君の傷が治った原因について話すことができそうじや。おそらく君の身体は、摂取したものを全て魔力に変換しているのじやろう。そして、必要な分だけ魔力を栄養に再変換している、だからどんなに食べても満腹にはならん

し、排泄という行為もない。また、怪我をしたりすれば魔力を自動的に使い治療するのじやろう。これがわしの推測じゃ。」

「お話しして下さってありがとうございます。……ダンブルドア先生、もし先生の推測通りだった場合、何故私の身体はそのような……普通の人と違うのでしょうか？私は、排泄について今まで疑問を持ったことはありませんでした……。これも何か関係してるのでしょうか？」

魔眼といい、食事といい普通の人間とは私は違う。それこそ魔法使いの中でも極めて特殊だろう。これではまるで、化物じゃないか。

「ルクスリア、君は確かに少し変わっておる。それは紛れもない事実じゃ。」

ダンブルドア先生はキラキラとした目で話しかけてきた。私なんかの考えなんてお見通しみたいだ。

「変わっているが君は人間じゃよ。ちつとばかり個性が強いだけじゃ。」

ダンブルドア先生はなんでもないことみたいに笑った。それだけで不思議とその通りかもと思えるから不思議だ。

「さて、君の質問に答えようかのう。恐らく、何かの意思が君の身体をコントロールしているのではないかとわしは考えておる。その意思が君の意識にも手を伸ばし、刷り込みをしているため君は違和感を感じなかったのではないかな。」

「……その、何かとは……」

自然と手が身体の一部を触った。

「君の右眼だとわしは思っておる。」

やっぱり右眼か。

右眼の意思が私をコントロールしているのか。

忌々しい。

「あくまで推測じゃよ。どれ、わしはそろそろおいとましようかのう。あまり長いこと話しているとポピーに怒られるのでな。」

ダンブルドア先生はそう言って、困ったように笑った。そして、椅子から立ち上がった。

「幸い明日、もう今日か、授業は休みじや。ゆっくりと休みなさい。」
ダンブルドア先生は去ろうとした。

「ダンブルドア先生、一ついいですか？」

「よいとも。」

ダンブルドア先生は満面の笑みでこちらを振り返った。

「右眼のことについて、ハリー、ロン、ハーマイオニーに話そうと思うんですけど、良いですか？」

「ルクスリア、君は何故話そうと思ったのかね？」

「三人は私の大切な友達です。ハリーには見られちゃいましたけど、秘密にしておくのはなんだか三人を信頼していないみたいで嫌なんです。」

「なら、わしの答えはイエスじゃ。」

ダンブルドア先生はウィンクをしながら、茶目つ気たつぷりに笑った。

「あともう一ついいですか？スネイプ先生との個人授業を来年も続けてもいいですか？」

「構わんよ、セブルスにはわしから言っておこう。」

そう言っつて、ダンブルドア先生は去っていった。

それからの日々はあつという間に過ぎていった。傷は治ったもの

の、マダム・ポンフリーに医務室での静養をしろと言われた3日間は、色んな人が御見舞いにきてくれて大変だった。知らない生徒も多くてちよつとびっくりした。そのおかげで、一年分位のお菓子の山ができてあがった。……またパリンパリン言うものがあつてそういうのはこつそり捨てた。

医務室から解放されて、大広間で食事をとる時に、ダンブルドア先生との話を思い出して食べる量を気にしていたら、クラップとゴイルが来て一緒に食べてくれた。彼らなりに私を心配していたらしいとマルフォイがこつそり教えてくれた。

寮杯は、ダンブルドア先生の過剰とも言える私達への得点によって、グリフィンドールが手にすることができた。

ところで、なんで私達にネビルが立ち向かったことを知ってたんだろう？

ダンブルドア先生の許可が下りたことをスネイプ先生に告げに行くと、苦虫を100匹噛んだ顔をされた。

それでも、去り際に

「何を学びたいのかを、夏休み中に纏めてきたまえ。」

と言ってくれた。やっぱりいい先生だ。

そして、今ホグワーツ特急に私達は乗っている。私、ハリー、ロン、ハーマイオニーでコンパートメントを一室占拠してしまった。

「ねえ、ルクスリア、君は孤児院に戻るの？」

「私の場合孤児院に戻るのは良くないって、ダンブルドア先生が言ってくれて、漏れ鍋のトムさんの所で、夏休みの間御世話になることになつてるんだ。」

魔眼の力は非常に強く、スネイプ先生が再び孤児院を訪ねたところ、どんなに忘却呪文をかけても私のことを求めていたらしい。

いつか、孤児院の人達の呪いを解くことができたらいいな。いや、解かなきゃ。

「そうなんだ。僕もルクスリアみたいにトムさんの所に御世話になり

たかったよ。」

「それなら、二人とも僕の家遊びにおいでよ！もちろんハーマイオニーも。」

「私の家にも招待するわよ。特にルクスリアには是非来て欲しいわ！」

そんな話をしながら、楽しく過ごしていると既にホグワーツ特急はキングスクロス駅まで残り半分ほどになっていた。

「ねえ、私、三人に話しておきたいことがあるの？」

「どうしたんだい？そんなにあらたまつて？」

ロンが意図が分からないといった感じで首を傾げた。ハーマイオニーも同じだ。ハリーは察したみたいだ。

私は髪を左右に分け顔を出す。

「私の右眼について話したいの。」

ロンとハーマイオニーも以前から気になっていたのか、急に真剣な顔になった。

「私の右眼は、魔眼なの。それもとても強力な。私の右眼を見た人の心を魅了してしまう。そんな呪いをかけてしまうの。」

「そうだったんだ……。だからあの時クィレルとヴォルデモート「その名前を言わないでくれ!!」、ごめんよロン、例のあの人があんな風になったんだね。……でも、僕も君の右眼を見たけど平気だよ？」

ロンとハーマイオニーは予想と違った内容だったのか凄く驚いていた。

「私にも分からないんだけど、呪いにかかる人とそうでない人がいるみたいなの。でもらかからなかった人は、ハリーの他にスネイプ先生しかいないんだ。」

これが分からない。ダンブルドア先生に聞いてもスネイプ先生に聞いても分からなかった。ダンブルドア先生はある程度の推測ができてみたいんだけど、「今は話す時ではない」と言って推測すら教えてくれなかった。

「なんで、二人はかからないのかしらね？」

私とハリーとハーマイオニーが考え込んでいると、勘弁してくれと

ロンが立ち上がり

「そんなにも考えても仕方ないだろう？魔眼があるかもしれないけど、ルクスリアはルクスリアだろ？」

ロンの言葉に私達は顔を見合わせ、笑ってしまった。

「なんだよ！何が可笑しいんだよ！」

「ごめんなさいね、ロン。まさかあなたの口からそんな言葉が出るなんて思わなかったから、つい。」

ハーマイオニーの言葉に私とハリーは同意した。

そのあと、ロンをなだめ残りの時間も楽しく過ごした。

キングスクロス駅に到着し、電車から降りた。

駅のホームは多くの家族で溢れかえっていた。

そのなかにいるトムさんを見つけた。こちらに手を振ってくれている。

「じゃあ、三人ともまたね！手紙書くね！私は漏れ鍋にいるから遊びにきてね！私も行けたら遊びに行くね！それじゃあ、よい夏休みを！」

そう言って、トムさんのもとへ私はかけていった。

「やはり、あの者にはかかったようじゃな。」

「貴方はどういふつもりなのですか？ 仮に戻ってくるような事があつた時、狙われる可能性ができたのですぞ？」

「だから、君に任せているのじゃよ。」

「我輩にどうしろと？」

「彼女に必要な力を授けてくれ。あの者は必ず戻ってくる。」

「……承知しました。」

夏休み〜ホグワーツへ

「お嬢ちゃん、こっちも頼むよー」

「はーい、今行きます。」

お客さんから注文を受けた。

夏休みに入ってから、トムさんの所に御世話になっている私は、忙しい時間帯だけお店の御手伝いをしている。

トムさんは、やらなくていいって言ってくれてたけど、それでは申し訳ないと私が無理矢理頼み込んだ。

御手伝いは大変な時もあるけど、とても楽しい。この数週間で色々な魔法使いと話すことができた。そのおかげで、魔法界について詳しくなれた。

ロンとハーマイオニーとは、手紙を送り合っている。残念ながら夏休み中に、二人の家には遊びに行けない。だけど、夏休みの終わりに皆でダイアゴン横丁で買い物をするようになってるから、それがとても楽しみ。

だけど、不満というか不安なことがある。ハリーに手紙を何通送っても返事が返ってこない。最初は、なんで返事をくれないのか不満だったけど、ロンとハーマイオニーにも返事が来ないと知り、ハリーの身に何かあったのかと心配している。

ギイイ

お店の扉が開いた音がした。そちらに目を向けると去年一年間で見慣れた不機嫌そうな顔が見えた。

「こんにちは、スネイプ先生。何かお飲みになりますか？」

「我輩は暇ではないのでね、遠慮する。」

スネイプ先生は注文してくれなかった。

ケチなのかな？

「何か言いたいことがあるようだが？言ってみたまえ。」

失礼なことを考えていたら直ぐにバレた。スネイプ先生の目が怖い。

「これはこれは、セブルス、久しぶりだね。今日はどういった用件で

？」

トムさんがスネイプ先生に気付き話しかけてきた。助かった。

「新学期に必要な物のリスト、それに必要な金を持ってきた。本来なら鼻便で済ませるが、生徒を他人に預かってもらうことは例外の事なので様子を見に来た。」

「そうでしたか。ルクスリアちゃんは、とてもいい子だよ。お客さんとも仲良くなってちよつとした看板娘みたいになってるよ。」

トムさんが笑顔で話した。少し恥ずかしい。

「そうか。ルクスリア、これがそうだ受け取りたまえ。」

スネイプ先生はそう言って、手紙とお金の入った巾着袋をくれた。

スネイプ先生とトムさんは何やら話すことがあるようで、店の奥に入っていった。

残された私は早速手紙に目を通す。

『教科書リスト』

：

：

：

・闇の魔術に対する防衛術

「泣き妖怪バンジーとのナウな休日」

著ギルデロイ・ロックハート

「グールお化けとのクールな散索」

著ギルデロイ・ロックハート

「鬼婆とのオツな休暇」

著ギルデロイ・ロックハート

「トロールとのとろい旅」

著ギルデロイ・ロックハート

「バンパイアとバツチリ船旅」

著ギルデロイ・ロックハート

「狼男との大いなる山歩き」

著ギルデロイ・ロックハート

「雪男とゆつくり一年」

：

：

：

なんだこれは。新しい防衛術の先生はロックハートって人の大ファンなのかな？それでも、流石に七冊は多すぎるでしょ。

後は、特に変わった内容はなかった。箒を持っていても良くなったけど、私にそんなお金はないので関係ないし。

手紙を読み終える頃にトムさんが戻ってきた。

スネイプ先生は私の方を一度見てさっと店を出て行ってしまった。

それからの日々はあつという間に過ぎていき、今日は、ハーマイオニー達との買い物の日だ。だけど、結局ハリーからは何も連絡はなかった。ハリーは大丈夫なのかな？

「久しぶり、ルクスリアー！」

声のする方を向くと、豊かな栗色の髪の子が飛び付いてきた。

「久しぶりだね、ハーマイオニー。それと、はじめましてハーマイオニーのお父さんとお母さん。」

ハーマイオニーは、両親と共に来たようだ。

「はじめましてルクスリア、ハーマイオニーから話は聞いているよ。」

ハーマイオニーと仲良くしてくれてありがとう。」

そう言つて、グレンジャー夫妻は微笑んだ。穏やかな人達だ。

そうしていると、漏れ鍋の奥にある暖炉の火が緑色に光始めた。

その火の中から、燃えるような赤毛をした人達がゾロゾロと出てきた。ウィーズリー家だ。見たことのない女の子もいた（末妹のジニー）。

その中に、ひとつだけ黒でクシャクシャの頭がひとつあった。

ハリーだ。

その後、ハリーから夏休みに連絡をくれなかったことについての事情を聞いた私達は、ハリーに同情した。

双子が空飛ぶ車の話で暗くなった雰囲気をぶち壊し、ウィーズリーおばさんに怒られた後に買い物に出掛けた。

ある程度買い物を終え、最後に教科書を買いにフローリシユ・アンド・ブロッツ書店に来た。

書店の前には人だからできており、魔女でごった返していた。

書店の窓を見ると、ポスターが貼つてある。

『ギルデロイ・ロックハートのサイン会』

写真もあり、整った顔の男が白くて歯並びの良い歯を見せてびらかすかのように笑顔を見せ続けていた。

「まあ、なんとということでしょう！本物の彼に会えるんだわ！」

ウィーズリーおばさんが感極まった様に話始めた。

「ママはあいつにお熱なのさ。全く困ったもんだよ。あいつの本のせいで僕んちの家計は火の車だつてのに。」

ロンがげんなりとした様子で言ってきた。

「ほんと、流石に高すぎるよね。私もホグワーツから貰ったお金の額を見てびっくりしたよ。」

「二人とも仕方ないわよ。彼つて素晴らしいもの！素晴らしいものに

は相応しい値段がつけられるものよ。」

「どうやら、ハーマイオニーもお熱のようだった。」

「よし、待っていてもしょうがない!とつとと買ってしまおう!」

ウィーズリーおじさんが、埒があかないと店の中へと踏み込んだ。私たちもはぐれないように着いていく。

「こういう時に、ウィーズリー家の赤毛は目立っていいね。」

「ルクスリア、君も人の事は言えないよ。」

ハリーが呆れたように言ってきた。たしかにピンクも目立つか。

「でも、ハリーの額の傷痕も見られたら一発であるハリー・ポッターだってバレるぜ。」

ロンが後ろから話してきた。

「ちよつと、ロン!こんな狭い店内でそんなこと言ったら……」

「ハリー・ポッター?」

「ハリー・ポッターがいるのか?」

店内がざわつき始め、次第に店内の人の視線がハリーに収束していった。

「やれうれしや、ハリー・ポッターか。」

一際大きい声があがり、サツと人波が割れ一人の男が近づいてきた。店頭に貼ってあった写真の男だ。男はわざとらしいほど、大袈裟に喜びを表しながらハリーに近づくと、サツとハリーの隣で決めポーズをとり、カメラマンが強烈なフラッシュでバシバシと撮り始めた。

「ハリー笑って。皆さん明日の新聞の表紙はこれで決まりですよ。この場を借りて発表しますが、私、ギルデロイ・ロックハートは今年度よりホグワーツで闇の魔術に対する防衛術の教鞭をとることになりました!」

この人が新しい闇の魔術に対する防衛術の先生なの?!まさか自分の著書を教科書に指定していたなんて……。

ハリーはロックハートに無理矢理肩を組まれ、不快感を隠そうとせず、写真に撮られている。

「ハリーは写真に撮られるのを嫌がっています。ハリーを解放してく

ださい！」

私はロックハート（一応先生だけど）に向かってやめるように言った。

ロックハートは私の方を向くと、店頭に貼ってあった写真のような笑顔を見せ返事をした。

「お嬢さん、そんなことはないですよ。この私とあのハリー・ポッターのツーショットですよ。魔法界の誰もが望んでいるツーショットです。それをハリーが嫌がるわけがないでしょう。……ああ、分かりました!! 貴女も私と一緒に写真が撮りたいんですね。いいですとも、いいですとも、さあ、カメラマンさん此方のお嬢さんとも撮りますよ、いや、いいんですよ、フアンの期待に応えることは大切なことですからね。お嬢さん折角この私と撮るのですから顔を見せてくださいよ、写真を撮る時はスマイルですよ。」

そう捲し立てたロックハートは、私の前髪に振れ顔を頭にさせようしてきた。

「触るな！」

私はロックハートの手を払いのけた。なんなのこの人は、自分の都合の良いように解釈して勝手に話を進めてくるなんて、なんて強引な。

「どうやら随分と恥ずかしがり屋さんみたいですね、それでは私のサインつきの著書を全て差し上げますよ、勿論無料ですね。」

そう言ってロックハートは、ウインクと彼の著書全てを私に寄越し、さっさとサイン会に戻っていった。

こんな人に今年は教わることになるのか……。

先が思いやられるなあ……。

「ごめん、皆疲れたから先お店出るね。」

そう言っただけで私は先に店を出て待つことにした。

しばらくすると、店の中から黄色じやない本当の悲鳴が聞こえ始めた。少しするとマルフォイが髪や服が乱れた父親(?)と一緒に出てきた。マルフォイは此方を一瞥すると、さっさと父親に連れられ行ってしまった。

その少し後、皆が出てきて（ウィーズリーおじさんも髪や服が乱れてた）漏れ鍋に帰り、皆と別れた。漏れ鍋への帰り道、ウィーズリーお婆さんとハーマイオニーはロックハートについて熱く語り合っていて、皆が辟易していた。

だけど、そんな中私に突き刺さる視線を感じた。

夏休みが終わり、いよいよホグワーツに戻る日が来た。去年と同じようにトムさんがキングス・クロス駅まで送ってくれた。

「また来年も私の所へおいで、ルクスリアちゃん。なんだったら、クリスマスに帰ってきてもいいんだよ。」

「ありがとうございます、トムさん。クリスマスはまた連絡しますね。では、行ってきます！」

「待っているよ、目一杯楽しんでおいで。」

そう言って、笑顔で送り出してくれた。

お父さんがいたら、こんな感じなのかな？

少し、嬉しくて寂しい気持ちになった。

列車に乗って待っていると、ハーマイオニーがやって来た。ハーマイオニーと話しながらハリーとロンを待っていたけど一向に現れない。

そのまま列車は出発してしまった。

私達が不安に思っていたら、息を切らした双子がきた。

「おはよう二人とも。ハリーとロンは？ けっこうギリギリだったの？」

私が聞くと双子は、顔を見合わせ居心地悪そうに話した。

「ハリーとロンなんだが」「俺達もギリギリで急いでたんだ」「列車に乗って後ろを見たら」「そこにいるはずの二人がいなかったんだ」「そしたら発車しちまって」「二人は乗り遅れちまった」

なんだって、それは大変じゃないか！

二人とも今頃不安に違いない。

「大丈夫よ、きつと。あそこには大人の魔法使いがたくさんいるし、ハリーにはヘドウィグがいるからホグワーツに連絡もとれるわ。遅れるでしょうけど大丈夫よ。」

そうハーマイオニーが落ち着いて言った。流石ハーマイオニー、冷静だ。

ハーマイオニーの言葉で、私も双子も落ち着きを取り戻しコンパートメントでホグワーツに着くまで過ごした。

二人が空飛ぶ車で来たことを知ったのは、久々のホグワーツの食事を堪能した後だった。

ギルドロイ・ロックハート

「まさか、列車に乗れなかったからって空飛ぶ車でホグワーツに来るなんて思わなかったよ。随分思い切ったことをしたよね。しかも、貴重な暴れ柳に激突しちゃうし。ヘドウィグを使えば良かったのに。」
「ルクスリア……もうその話はやめて……。」

ハリーが項垂れながら返事をしてきた。その隣にいるロンは、ついさつき吠えメールが来て散々ウィーズリーおばさんに怒られたばかりなので酷く落ち込んでいる。通り過ぎる生徒達もロンを見るとクス笑いながら去っていく。

「退学にならなかつただけ良かったじゃない。これに懲りたら落ち着いて行動することね。」

ハーマイオニーは呆れたように朝食のパンにマーマレードを塗りながら言った。

「この後罰則もあるなんて、嫌だなあ。何より見てくれよ僕の杖を……。」

そう力なくロンが言い、ハリーとロンはガツクリと肩を落とす。ロンの杖は暴れ柳に激突した時にポツキリと折れてしまつて芯が見えてしまつていた。ウィーズリー家には新しく杖をかうお金も無く、ロンは泣く泣く折れた杖をテープでぐるぐる巻きにして使わざるを得ないらしい。……ロックハートの教科書が無ければ買えたかもしれないね。

「ほらほら、ご飯食べて元気だしなよ。早く食べないと、授業始まつちやうよ。」

そう言つて二人を励ましつつも、私は久々のホグワーツの朝食を満喫した。

朝食を終え、最初の授業である薬草学を受けるために移動していると、突然後ろから大きな声があった。

「やあやあハリー、昨日はずいぶんと凄いいことをしたね、いや、私は君

に謝らなければならないと思ひましてね、私は君に教えてしまったのですよ、有名になるといふ蜜の味を！分かります、分かりますよハリ、新聞に私と載つてその快感を覚えてしまったんでしようね、ええ、ええ分かりますとも、ですが、ハリ、もう少し上手なやり方を取つた方がいいですよ、まあ私のように上手くやるのは難しいでしようけどね！」

「ロックハート先生、僕、そんなつもりじゃありません！」

突然現れたのはロックハートだった。いや、ロックハート先生か。書店で会つた時と同じように、ハリに向かつて早口で捲し立てている。

ハリは反論したけど、

「恥ずかしがることはないんですよハリ、誰だつて有名に成りたいと思つているものですよ、この私だつてそうです、皆誰かに認められたいのですよ、おっと、私は授業の準備をしなければならぬので失礼しますよ」

そう言つて、ロックハート先生は言いたいだけ言つてさつさと去つていった。

薬草学の授業ではマンドレイクという植物(?)を育てるための授業が行われた。マンドレイクは回復薬の材料になるらしい。マンドレイクは引っこ抜くと悲鳴をあげるんだけど、この悲鳴を聞くと最悪死に至るらしい。今日の授業はマンドレイク

を大きめの鉢に移すのが課題だったからヘッドホンを着用して移した。

薬草学の授業が終わつて廊下を歩いていると、グリフィンドール生が近づいてきた。とても小柄で見たことないし一年生かな？

そのグリフィンドール生はハリーの前に来ると、
「僕、コリン・クリービーつて言います！ハリ、僕君の大ファンなんです！写真撮つてもいいですか!?!」

写真を大声でせがみ始めた。

「写真？写真だつて？君は写真を配っているのかい、ポッター？おい

皆、かのハリー・ポッター様が写真を配ってるらしいぞ。」

コリンの大声を聞きつけたのか、マルフォイがやって来てハリーを冷やかし始めた。

「僕は写真なん「写真ですって!?!」」

今日二度目の声が廊下に響き渡った。それにしても皆ハリーのところによく来るね。

ロックハート先生がああ笑顔をはりつけ大股でハリーに近寄って肩を組始めた。

「さあさあ撮りたまえ、クリービー君!あのハリー・ポッターとこの私ギルデロイ・ロックハートのツーショットですよ!マルフォイ君もどうぞだい、遠慮することはないですよ、ん?、カメラを持っていないんですか、残念ですね、、、そうですね、クリービー君今度マルフォイ君に君が撮った写真をあげてください、いえ、いいんですよマルフォイ君、フアンの期待に応えるのも私の仕事ですからね、ああ、ハリー、写真を配るのはとてもいい方法だと思いますよ、一見地味ですが有効な方法です、写真は何度も見れますし、一瞬を切り取るのですから色々とできますしね、いやしかし私は罪な男ですね、若い男の子に有名になるといふ快感を覚えさせてしまったんですからね!」

ロックハート先生はまたも一人捲し立て、コリンは水を得た魚のようにシャツターを押しまくっている。ハリーはなんとか逃げ出そうとしているけど、ロックハート先生にガツチリと肩を押しさえられて動けないみたい。

マルフォイが流石に引いていた。

「かの有名なロックハート先生らしいよ、マルフォイ。貴方も書店で見たでしょ。会うたびにハリーがいつも被害にあってるの。」

「ポッターと仲良しな君は助けられないのかい?」

「書店ではそうしたよ、私がああの時ロックハート先生に怒りを感じてたしね。そのあととつと怒ったけど。でもそれはホグワーツの外だと守ってくれる人がいないからだだから。ホグワーツならダンブルドア先生がいるしハリーが本当に困るようなことは防いでくれると思うから、それにロックハート先生に絡まれることで命の危険は無

いだろうしね。」

マルフォイは面白くなさそうに鼻をならして去っていった。

ハリーに視線を戻すとロックハート先生は既にそこにはおらず、満足そうなコリンとハリーが私達を恨めしそうに見ていた。

とうとう闇の魔術に対する防衛術の授業の時間になってしまった。教室を見てみると、ハーマイオニーのようにお熱の女子がいるようだ。私にはよく分からない。外見が整っているから好意を持つという感覚はどういうものなんだろう。

そんなことを考えていると、奥の小部屋からロックハート先生が現れ、既に見慣れたあの笑顔で授業を始めた。

こんなに酷いテストは初めてだ。むしろテストなのだろうか。なんで闇の魔術に対する防衛術の授業で、ロックハート先生についてのテストをするんだろうか。わけが分からない。

そして、二年生最初の授業にも関わらずいきなり実戦(?)形式の課題を出すと言った。それに対抗する呪文を教えずに。

「さあ、この邪悪な存在であるピクシー妖精に皆さんがどの様に対処するのか見させて頂きましょう！」

そう言つて、ロックハート先生はピクシー妖精を解き放った。

ピクシー妖精は全身青紫色で背中に羽をはやし、ギョロつとした大きな目が特徴だった。彼らは教室を自由に飛び回り、生徒にイタズラをし始めた。

「どうするんだよ、これ！」

ロンが悲鳴をあげている。

「一体ずつやっててもキリがなさそうね。とりあえず全部停止させましょう。ルクスリアいける？」

「いけるよー!3カウントで一緒にかけよう、3、2、1、」

『イモビラスー動くなー!』

私とハーマイオニーが同時に停止の呪文をかけた。今まで散々暴れまわっていたピクシー妖精達が硬直し空中をフワフワと漂うだけ

になった。

「ロックハート先生、ピクシー妖精に対処できまし……先生はどこかしら？」

ハーマイオニーがロックハート先生に伝えてようとしたらロックハート先生は既に教室にいなかった。

「あいつならピクシー妖精に杖取られて奥の部屋に引っ込んだぜ。流石有名な魔法使いだよな。」

ロンがピクシー妖精に噛まれたところを擦りながら教えてくれた。

ようやく、新学期初日の授業が終わった。夕食を済ませ、談話室でくつろいでいる。談話室の隅ではコリンが今日撮ったハリーの写真を他の一年生に見せびらかし、欲しい子には配っている。その様子をハリーはロックハート先生に何度も絡まれたせいか疲れきった顔で見ていた。

「今日は災難だったね、ハリー。ロックハート先生の言うこと気にしない方がいいよ。私達はハリーが有名に成りたいとか思っていないの知ってるから。」

「ありがとう、ルクスリア。少しは気持ちが悪くなったよ。」

「でもハリー、ロックハート先生は貴方を困らせようとしたわけではないはずよ。貴方の昨日の行動を先生なりに注意しただけよ、きつと。」

ハーマイオニーはロックハート先生をフォローした。なかなか熱は下がらないみたい。

今日の様子を見てると、思っていたよりもロックハート先生は優れた魔法使いではないのかもしれない。ピクシー妖精に杖を奪われるなんて、他のホグワーツの先生ならあり得ないだろう。

それに、なんだか私を見る目が他の生徒と違う気がする。でも、魔眼のせいでは無さそうだし、なんなんだろう？

新学期が始まってから初めての魔法薬学の授業の後、私はスネイプ先生に個人授業のお願いをするために教室に残っている。

「さて、それは勤勉な君は何を学びたいのだ？君が学びたいことを決めてくるということだったが、決まっているのかね？」

スネイプ先生は去年と変わらない調子で話を始めた。学びたいことについては夏休みの間にしっかりと考えてある。

「スネイプ先生、私に魔法での戦い方と魔眼について教えて下さい。」

「魔法での戦い方と魔眼についてか。」

そう、この二つについて私は学びたい。

「ふむ、まず何故戦い方を教えて欲しいのかね？」

「去年私は授業やスネイプ先生との個人授業のおかげで多くの魔法を使えるようになりました。でも、使えるだけではダメでした。クイレル先生と戦った時にあっさりとは私は負けてしまいました。あの時、恐らく盾の呪文を使い続けなければ私が傷つくことはほとんど無かったと思います。それだけでは大切なものを守ることができませんでした。相手を無力化しなければ守れない時もあると思います。なので、戦い方を知りたいんです。」

私はあの時、クイレル先生の単純なフェイントにかかりあっさりと負けてしまった。クイレル先生も言っていたが、魔法が使えるだけなのだ。使えるだけではなく、使いこなせるようにならなければ、守りたいものを守れない。そんな気がする。

「なるほど、では、魔眼については何故かね？」

「私が Hogwarts に来ようと思った理由の一つがこの魔眼の力をコントロールできるようになりたいからです。去年一年間は向き合うことをどこか恐れていて、調べたりできなかつたんですけど、それじゃダメだと思つて、だからまずは魔眼について勉強しようと思つたんです。」

去年は魔眼殺しのおかげで他の人とちゃんと接することができるようになったのが嬉しすぎて、向き合うことを避けてた。でも、孤児院の院長先生達みたいに呪いをかけてしまったままの人が何人もいる。もし可能であれば呪いをといてあげたい。そのためには魔眼について知らなきゃ。

「分かった。では、毎週この時間に行う。時間は限られているため、課

題を多く出すが、出せなかった時は分かるな？如何なる事情であろうと考慮しない。さて、今日はここまでする。課題は明日の朝までに決めておく。それでは、寮に帰りましたまえ。」

こうして、新しい一年が始まった。

穢れた血

二年目のホグワーツでの生活が始まってから初めての休日。

なのに私は朝早く起きて大広間に向かっている。何でかと言うと、今日はグリフィンドールのクイディッチチームが今年度初練習で、選手であるハリー達を応援しに行こうとロンが誘ってくれたからハーマイオニーを加えた三人で見に行く。

私はスネイプ先生の課題があるから最後までは見れないけどね。

昨日の夜、クイディッチチームのキャプテンであるオリバー・ウッドは凄かった。去年あと一步のところで優勝杯を逃したからか、他の選手に鬼気迫る勢いで朝練習の重要性を説いていた。

ハリー達他の選手は朝練習に乗り気じゃなかったみたいだけど、ウッドの説得に根負けしたみたい。

大広間に行くといつもよりずっと早くロンがいて、既に朝食を取っていた。本当にクイディッチが好きみたいだ。毎日クイディッチの朝練があればいいのに。

ロンにおはようと言い対面に座り、朝食に手を伸ばした。

ハーマイオニーは手こずってるのかな？

ハーマイオニーが髪の毛と戦っていたせいで予定よりも遅くなった

てしまった。今度髪の毛をセットしてくれる呪文でも探してみよう。急ぎ足でクイディッチの練習場に近づいていくと、なにやら紅と緑が向かい合い、一触即発の雰囲気醸し出していた。

「なんで、スリザリンの連中がいるんだ？ウツドの奴、気合いだけ空回りして競技場の予約し忘れてたのか？」

「昨日ハリー達を説得するために、許可証を見せて逃げ道塞いでたからそんなことは無いと思うよ。たぶん、スリザリンが割り込んできたんじゃないかな？……ん？マルフォイがユニフォームを着て並んでるね」

「何であんな奴が選手に……なんてこった！スリザリンの奴らが持つてる箒は全部最新式のニンバス2001だ！マルフォイの奴、箒を買って選手になりやがったな!!」

私達は話し声が聞こえる距離まで近づいた。マルフォイが得意気に箒を見せびらかしながらグリフィンドールチームを挑発していた。「君達の持っているような箒じゃこのニンバス2001には遠く及ばないさ。特にウィーズリー達の持っているその箒、なんだいそれは？骨董品かい？そんなもので、僕等に勝てる筈が無いんだから練習場を明け渡せ。何度も言うが、スネイプ先生から許可は頂いている。」

グリフィンドールチームは挑発にのり頭に血が上っていた。だけど、一番上っていたのは、

「グリフィンドールのメンバーはお金なんかじゃなくて、才能で選ばれているわ!」

ハーマイオニーだった。普段冷静なハーマイオニーが怒っている。正義感の強いハーマイオニーらしいね。

突然乱入してきたハーマイオニーに一瞬驚いたマルフォイ達だったが、直ぐに意地悪い顔に戻り、

「外野は引っ込んでいてくれないか？この穢れた血め。」

一瞬でその場は静まり返った。そして、グリフィンドールの怒りが爆発した。さっきまでの練習場をめぐるの怒りの比ではなく、怒号が飛び交い始めた。

私は事態が飲み込めない。ハリーも同じみたいだ。

「なんてことを！」

「この野郎、ぶん殴ってやる！」

ハーマイオニーは口を真一文字の結び、何か堪えているような顔になった。

「言ってはいけないことを言いやがったな!!許さないぞマルフォイ!!」

我慢できなかつたロンが杖を抜き呪いをマルフォイにかけようとしたが、折れた杖から呪いが逆噴射し、ロン自身に呪いがかかってしまった。

ロンは顔を真っ青にし、口から特大の蛞蝓を吐き出し始めた。

スリザリンはロンのその様子を見て大笑いし、それが更にグリフィンドールの神経を逆撫でした。

「ねえ、マルフォイ、『穢れた血』ってどういう意味なの？」

全員の視線が私に集まった。グリフィンドールの反応と言葉から良い意味ではないことは分かるけど、正しい意味は分からない。

マルフォイが誇るように話始めた。

『穢れた血』というのは魔法族の血が流れていないマグル出身の魔法使いの事さ。僕らのように魔法族の血しか流れていない魔法使いを『純血』と言うんだよ。そこにいるウィーズリーの家系もそうさ!ウィーズリー家は『純血』でありながらマグルや『穢れた血』に近づこうとする恥知らずだな。」

「俺達はたしかに『純血』だがそれを誇ったりはしない!」「マグル出身者や混血でも俺達より優秀な魔法使いはいくらでもいる!」

フレッドとジョージが一緒にするなどマルフォイに噛みついた。

ロンも蛞蝓のせいで言葉を発する余裕がないけど、マルフォイを力強く睨み付けている。

でも、そうか。

見た目だけじゃないんだ。

流れてる血だけで人を見てしまう人もいるんだ。

それって、なんかむかつく。

「マルフォイ、もう一つ聞いてもいい？」

再び私に視線が集まった。マルフォイは「構わない」と促してきた。「両親の顔も知らず、親戚も全く分からず、だけどホグワーツに入學し、一年間一緒に学んできた私を、貴方はどんな風に見ているの？」スリザリンは私の言葉を聞き、再び笑い始めた。私の生い立ちについて笑ってるのかな？

ただ、マルフォイだけは普段から青白い顔から更に血の気が引いた。

「た、確かに君に流れている血は判らないかもしれないが、き、君はグリフィンドールにいるのが惜しいくらい優秀だか……」

話始めたマルフォイだったけど、最後まで言葉が続かなかった。

私の言いたいことがわかったのかな？

わかったのならやっぱりマルフォイは悪い人じゃないんだろうな。

今日の事は許さないけど。

「今は言えないみたいだから今度教えてね。私はロンを連れていくから、またね。あつ、どっちが練習するかの話を邪魔してごめんね。」

私はハーマイオニーとロンを支え、その場から立ち去った。

マルフォイは視線を私とハーマイオニーに向け続けた。

競技場を後にした私達は、近くにあったハグリッドの所に来た。ハグリッドに事情を説明すると、

「我慢せずに吐いた方がええ。」

と言って、大きなバケツをロンにくれた。ロンがゲロゲロしてる間（蛞蝓だけど）、私とハーマイオニーにはお茶とロツクケーキをくれた。

ロックケーキは少し固いけど美味しかった。ハーマイオニーは一口かじって食べるのやめちゃった。

3杯目のお茶が飲み終わったころ、ようやくロンは話ができるくらい落ち着いた。

「マルフォイのやつ、ハーマイオニーにあんなこと言いやがって!!でも、ルクスリアの言葉はスカツとしたよ。マルフォイのやつ何も言い返せなくなってるさ!!」

「だって、『たったひとつの事でその人を判断するなんて!!』ってムカついちゃったんだもん。内面を見た方が絶対いいのにさ。見た目とか血筋とかそんなことどうでもいいのに。」

私の言葉にロンとハーマイオニーはその通りだと元気よく頷いてくれた。

でも、ハグリッドは少し困った顔をして

「ルクスリア、お前さんの言うことは最もだ。俺だって『穢れた血』なんて言う奴等はどうかしてると思う。大事なものは内面っていうのもよく分かる。けどだな、そいつらにとつては……いや、これは俺が言うことじゃねえ。お前さんならそのうち気が付くだろう。すまん、忘れてくれ。」

と言って黙ってしまった。

ハグリッドの家を出た私は、落ち着いたロンを医務室に連れてい

き、スネイプ先生から出された課題のために図書館に来た。

ただ、いつもとは違って並んでいる本には目もくれず、図書館の奥へと進む。

奥には鍵のかかった扉があった。さつき借りた鍵を使い、扉を開け中に入る。

そこは、普段使っている図書館とは雰囲気違った。なんとなく、空気が重い気がする。

「さて、魔眼について教えると言ったが、我輩であつてもそこまで深い知識を持っているわけではない。魔眼とは希少で、また謎の多いものなのだ。生徒が普段見ることのできるものには記載などされていないだろう。だが、閲覧禁止の棚には置いてあるだろう。許可証を君に渡しておく。調べてきたまえ。ただし、中には見るだけでも危険な本もある。少しでも妖しいと思つたら見るのはやめろ。」

スネイプ先生の言葉を思い出しながら本棚を見ていく。

でも、スネイプ先生もよく知らないのは意外だったな。最初に会つた時に直ぐに私の右眼が魔眼つて気がついてたから知ってるのかと思つてた。

置いてある本はタイトルが読めないものや、逆に嫌でも想像して不快な気持ちになるようなものが並んでいる。

しばらく探したところでようやくそれっぽい本を見つけた。

『魔法界における希少例　―捕獲して研究したい―』

不穏なタイトルだった。生きてるかどうかは知らないけど、筆者には是非とも会いたくない。

安全かどうかを確認し大丈夫そうだったので、手に取り、本を開いた。

パラパラとめくり、魔眼に関するページを見つけた。

『魔眼とは、文字通り魔法の力を持った眼のことである。魔眼は多種多様であるが、大きく以下に分類できると考えられている。まず、常時発動型か任意発動型である。これらはその力をコントロールでき

るか否かの分類である。もう一つは種族固有のものなのか、それとも突然変異のものなのかである。これら二つの分類を組み合わせた4つのタイプが魔眼の区分といえる。しかし、サンプル数が少なく研究例が少ないためこれで正しいのか確かめるために、多くの研究が必要であり、是非とも捕獲して研究したい。』

この筆者は本音が駄々漏れすぎる気がする。他の全てのページを見ても最後に、『研究したい』『捕獲したい』『解剖したい』と書かれているし。

内容的に私は、常時発動型の突然変異の魔眼と言ったところなのかな。

魔眼については書いてあったけど、タイトル通り情報が少なかつたな。

とりあえず、今日はこれを書き写すことで終わりにしよう。

空飛ぶ車に乗ってきた罰則にハリーとロンが連れていかれた同じ時間に、私はスネイプ先生との個人授業に来ている。今期は週末に行うことになった。わざわざ休みの日に時間を作ってくれたようだ。

「ふむ、あの本を見つけたようだな。我輩が魔眼について知ったのはあの本だ。」

私が提出したレポートを見たスネイプ先生は、頷きながら話した。「読んで分かったであろうが、魔眼とは希少なものだ。恐らく世界中探しても、魔眼を持っている人間は君を含め一人か二人だろう。」それじゃあ研究したくもなるか。研究対象が一人か二人しかないないんだったら、あれほど欲求が漏れても仕方ないのかな。研究対象にされるのは嫌だけどね。

「君の魔眼はおそらく常時発動型の突然変異だろう。君が望むような、常時発動型から任意発動型になったという例は、恐らく無い。しかし、希少で例が少ないということはたまたまコントロールできるようになれなかった例しか見つかっていないということも考えられる。」

なんと、スネイプ先生が私を励ますようなことを言ってくれるとは！

そんなことを考えるとスネイプ先生が私をギロリと睨み、

「何か勘違いしているようだが、我輩は研究者という視点で判断したまでだ。………まあいい、さて魔眼については引き続き調べてきたまえ。残りの時間で戦い方について教える。まず、基本として魔法使いの決闘を教える。杖を構えて下がりをたまえ。」

言われた通りにし、スネイプ先生と向かい合う形になった。

「まずは御辞儀だ。次に杖を顔の前に掲げ下ろす……もつと機敏にやれ、それから後ろを向いて相手の足音に合わせながら5歩下がり、下がったら振り向き『エクスペリ・アームズー武器よされー』」

スネイプ先生から放たれた呪文は私には当たらず、顔の横を通りすぎた。

「このように呪文を撃ち合う。さて、やり方は分かったな？もう一度行うが、次は当てる。君も本気でやりたまえ。ただし、呪文は武装解除のみとする。」

「分かりました。やります。」

今度は本気だ。スネイプ先生の目を見ると、普段よりも更に鋭い目付きになっている。

フーツと息を吐き心を落ち着けた。そして、スネイプ先生の目を見た。

「……準備はできたのかね？では、始めよう。」

スネイプ先生の言葉を引き金に御辞儀をし、杖を構える。

杖を下ろし、後ろを向く。

一步、二歩、三歩、四歩、五歩！

『『エクスペリアームズ！―武器よされー』』

私とスネイプ先生はほぼ同時に呪文を放った。

しかし、

「うわー！」

私の手から杖が跳んでいった。スネイプ先生は呪文を放った構えのまま、杖もその手に残っている。

「……二年生でその速度で呪文を放てるとはな。しかし、どんなに強力な呪文を相手より速く放ったところで当たらなければ意味がない。まずは狙った場所へ呪文を放てるようにならないといけない。だ。戦い方はその後だ。」

ぐうの音もでなかった。戦い方を知ればいいと思ってたけどそれ以前の問題だったみたい。

思えば呪文をしつかりと当たった時は的が止まっているか大きい時が多かったような気がする。

「さて、残りの時間は我輩が作る的に呪文を当てる練習をする。これができるようにならないければ、その先は一切教えん。」

「分かりました。お願いします。」

その後1時間程訓練をし、スネイプ先生に合格を貰ったところで今週の個人授業は終わりとなった。

談話室に戻ったとき、ハリーとロンはまだ戻って来てなかった。